

てりり、という名のものそこに在り。ふにゃふにゃの、ゆるやかで美しい心を持った人間。天使の化身。幼子の魂を持ち続けるもの。

てりりはゆったりと目を開けると、まだ霞がかかった世界をなんとなく感じ取る。眠りという名の世界の滅亡なら毎日起こっている。それでも夢から醒めて、きっと来ないであろうと思っていた明日はやって来て、今日になっていた。てりりは僕だ。

僕の生活は自分一人で遂行するのは難しい。誰かの手を借りなくては生きていけない。そういう風にできている。自分でなんとかしようとしてきたけれど、自分の力ではどうにもならないことだって、理解しないではないらなくなった。ただ、言いしれない息苦しさを疎んじないではいられない。どうして、わからない。でも、自分には誰かが必要だ。

僕のところに来てくれる人は様々で、入れ替わり立ち替わり僕を助けてくれるのだけれど、絶えず人手が必要なのに、人は来てくれたり、来てくれなかったり、僕を一人にしてみました、放っておいてくれなかったり、本当にみんな、勝手だね。いつ、誰が来て、どのように過ぎ、そしていつ帰っていくのか、僕には把握しようもない。ただ皆が入れ替わり立ち替わり、僕のために来るだけなんだ。今日だって、ただ誰もこない自由な時間を過ごしているかと思いきや、扉はノックされ、開かれ、話しかけられた。

「起きてたの」

ギューニヤンだ。ギューニヤンは牛であり猫であり人の少女だ。家族の誰が牛で猫で人だったのか前に聞いたけど、忘れてしまった。それらの成分が配合されているギューニヤン。中学生だったはずだけれど、学年はうる覚えで、何年生だったか思い出せない。多分、一年か、二年。牛乳を製造販売し配達する趣味を持っている。行政の誰が彼女にそんなことを許可したのかまるで分からないけど、しかし彼女は村の食糧事情を解決し続けているらしい。

「おはよう、ギューニヤン。僕は眠っていたところだよ」

「そう？でも起きてるじゃない。何してたの、清々しい顔してる」

座って牛乳を寄越してくれた。ありがたい。この一杯で繋がる命、日々を生き抜く力の宿り。

「うん、なんとなく、考え事だよ。僕の生まれてきた理由とか、神の存在とか、そういったことに思いを馳せてたんだ」

ごくんと飲み干す牛乳の音がする。「牛乳祭りだ、祀れ、祭れ」聞こえてくるのは耳の奥。喉から耳に届いたのだらうか。けれど、嗚呼、牛乳よ、今はギューニヤンと話すよ。僕は詫びる思いと共に牛乳を飲み下す。

「まあ、どんなことを考えてたのか教えて」

「うーん、いいけど、そうだな、あまり大したことではないんだ。今日は誰が来てくれるんだったか、いつ来てくれるんだったか、わからなくて、また一から思い出そうとしていたんだけど、一人一人の顔を思い浮かべて推理している間にギューニャンが来たと言う訳さ、本当はまだ何も考えていなかったんだけど」

「そっか、ごちゃごちゃ考えているようでいたのに、まだ何も考えていないスツキリした顔立ちだったのね」

「そうなんだ」

ギューニャンは僕を眺めて、なんだか楽しそうな顔をした。

僕は特に言うこともなくなっていて、上半身を起こしてみた後にあくびをし、左肘を床につけつつも右肩を下げず、首は宙を舞い、ガクガクとヘドバンするようについ動かしてしまってから、脳が揺れて気持ち悪くなる動きだったことを思い出し、案の定気分が悪くなって吐きそうな気持ち悪さを味わいつつ一瞬のうちに感じてしまうことは、己の記憶がすぐに忘却されてしまう特性への悲しみ、恨み、辛み、正常な人間に生まれて来た人間への羨み、妬み、嫉み、であり、そんな厭らしいことを感知してしまふ厭らしい自分の厭らしい感性の鋭さ、敏感さ、気持ちの悪さ、を遮断しようと思ったものの、そうする前にどうしたって感じてしまふ、自分という人間の持つ繊細な感覚器官による感じとりやすさを恨み、それでいて出来ることと言えば自分にとって不快な思いを出来る限り何も感じない段階のうちに無くすことしかないことを思い出し、不快さを元に生じた感覚の何もかもを全て忘れて無かった状態へと生まれ直す気持ちを確かに持って、光を生じる息を吸い、汚濁を底から吐き出して、ようやくと自分が今ここで生きていることを思い出した。

「トリップしてたよ」

「何処に？ 今？ かつての自分が？ てりりとして？」

「何処かはわからないけど、つい今しがた」

「どんな気持ちだった？」

「クルクルと車座になってドリルで掘削されるような気持ちだった」

「せっかく飲んだ牛乳が攪拌されてしまったね」

「そうだね、でもそれはいいことなんだよ」

驚いた僕はとっさに言う。

「そうなんだ？」

「まあね」

何もかもが終わった気持ちになって、僕は窓を見た。窓には枠があり、ガラスが嵌めてある。ガラスには僕の顔が写っているが、その向こうに外が透けて見える。何故かはわからない、しかしガラスは透き通り、そしていつか割れるのだろう。僕はセンチメントな気持ちになって、アリストテレス以来の人間のことを思った。アリスとテレス、誰だろう。僕はアリスのことしか知らない。テレスって誰だ、そんな人は不思議の国にいなかったと思うのだけれど、アリスと言えばテレスなものらしい。

「アリスの事を思い出したんだけど」
「うん」

「もう一人のことがわからないんだ」

「誰のことかな、ハートの女王や三月兎たち？それから不思議の国の様々な登場人物たち」

「それはわかるよ。でも、それ以外の人のことがどうにも思い出せなくて、なんだか悪い気がするよ」

「しょうがないよ」

「そうかもね」

「生姜も無いよ」

「造花もね」

僕はお腹が空いて、もう一口、牛乳をねだった。

「おかわり」

「今度はチーズをあげましょう、さあ食べて、一口で」

こぶし大のチーズは僕の口の中へと放たれた。さほど開かれていなかった僕の口は、勢いに押され大きく輪になって、噛みもしないそれはゴックンと音を立てて吸い込まれる。と同時に喉は咽せ、肺はこむら返りを起こし、胃は痺れ、足は攣り、瞳孔は開かれ、涎は垂れ流された。

「死ぬ」

「人は誰しも死ぬの、それが遅いか早いかの違いでしかない」

「助げて」

「いいよ」

ギューニヤンは僕の喉奥にヨーグルトを注いだ。溢れて漏れて僕は溺れた。脳裏には走馬灯が駆け巡る。葬式には誰が来てくれるんだろう。こんなことなら事前にみんなから香典を貰っておけば良かった。そのお金でマンションを建てて不労所得で暮らせばよかったんだ。辛く苦しい旅だった。僕はやっと楽になれる。神さま……

*

気づいたら僕は数人に取り囲まれていた。寝ていたはずのベッドの上に布団を敷かれそこに寝袋を乗せられその中にパジャマでくるまっているのが何故だか分からない。チョコレートバターの洪水が海から迫ってくる。みんなチョコバナナになっちゃうな。そう思っていると、蜃気楼の街が彼方に見える。あれが僕の故郷なんだろう。

「てりりさん！」

誰かが呼ぶ声がする。誰だ。

「良かった生きてる」

見ず知らずの人だ。誰なんだろう。

「ここが何処かわかりますか？」

「地球上、もしくは日本の領土内、東京都、多分そのはずなんだ、僕の部屋は」

「病院です」

「え、僕のベッドを病院に運んだの？ 道理でなんか変だと思ったんだ、ベッドの上に布団が敷いてあってその上に寝袋があってそこで寝てるなんて」「運んでいませんけどそうだったみたいですよ」

「運んでないのにそうだった？ あの波に流されて辿り着いたのだろうか、病室へ」

「ここは、院長室なんですけど、不思議ですね」

「アリスの国だね」

「熱は無いですね」

いつのまにか熱を計られていた。脇には体温計、腕には点滴の管が長いミズのように体内へと続いている。その奥のまた奥、冒険の結果得られた宝のように光り輝く胎児が繋がり、おぎやおぎやと泣いては側にいる母親を困らせている。見ず知らずの人が誰なのか、僕は聞いてみることにした。

「あなたは誰？ そしてその周囲にいる数人は？ 僕を知ってる誰かが見守ってくれていたのかと思っただけど、違うのかな」

「わたしはロイド、安堂ロイド。人は私をロイド・ライトと呼ぶでしょう。」

この病院の建築士であると共にあなたの運転手をしています。今は暇なので見よう見まねで看護してみましたよ」

僕はこの人を知っているのだろうか、記憶にないが、いつだって僕は何もかも忘れてしまうのだから、彼は僕の運転手なのかもしれない。

「それじゃ、僕は君に運転をしてもらえる、という訳だね」

「わたしが運転手であるからには、そうなりますでしょう、きっと、多分」

「僕は車や飛行機を持ってないんだけど、何を運転してくれるの？」

「車や飛行機だけでなく、自転車操業の運転なども致します」

「じゃあもしもどこかに行こうと思った時は、運転を頼んでみようかな」

「いつでも思ってくださいること、お待ち申し上げ候にございます」

礼儀正しい人だ、顔も性格も四角いんだな。

「ね、その後ろにいるあなたは誰？」

僕は背の高いスレンダーな女性に話しかけた。

「私はあなたの姉、お姉さん、姉貴、おねシヨタで言うところの、おね。そしてシスター。エルダーシスター。また忘れちゃったの」

「お姉さんとは、不思議ですね」

僕はこの人を知らないけど、なんとなく会ったことがあるような気がしなくもない。そのくらいのおやぶやな関係が、姉というものかもしれない。

「でその、お姉さんのお名前は」

「ジュリア」

「国籍は」

「USA」

「ふーむ」

異国の方だ。

「つまり宇佐市、大分なりけり」
「ほほう」

しかし姉。複雑な関係が予想される。僕の親というのは、どういう人たちだったんだろう。育てられたことはないので分からないのだけれども、もしかして僕も日本人ではないのだろうか……

「僕は日本人ですか？」

斜め後ろの少女が答える。

「そうだよ、わたしは妹の、綾、私が日本人なんだから、お兄ちゃんも日本人だよ」

「僕に妹がいるなんて知らなかった、いつ産まれたの」

「私が産まれたのなんてつい最近だよ、震災後だもん」

「じゃあせいぜい七歳くらいかな、そうは見えないけど」

「うん、そういう感じがいいと思う」

「不思議だね、十七歳くらいに見えるよ、僕がそんな年齢になった記憶も無いんだけど。と言うより、僕は十二歳じゃなかったの？」

「お兄ちゃんは四歳だよ、精神年齢が」

「でも僕は十二歳なんだ、多分」

「困ったね、私、お兄ちゃんのこと年下としか思えないよ」

「それは不思議だね。僕は年下のお兄ちゃんなのかもしれないね」

「だとするとわたしは年上の妹なのね。それがどういことなのか考えると頭が疲れちゃう」

「ああ、それじゃあ、ロイドに院内を運転してもらってきたらいい、彼には運転する役割があるのに、いつまでもこうして僕が病に吞まれていることで看護遊びに目を向けさせ怠けさせてしまっていることは申し訳ない、えーとジュリアという名のお姉さん、ポップコーンを買ってきて綾にあげてください、それと飴、綿菓子、ジュースとサラダ、あとフルコース、食べながらロイドに運転してもらってきて」

「もっとフランクに話してよ、いつもみたいに」

自分は普段どう喋ってたんだろう、ざっくばらんに話すことなんてあったっけ？

その時、綾が叫んだ。

「フランクに！ 話して！」

誰かが応える。

「はいはい私、フランクです、本名は不安苦、不安苦十把、フランク・ジツパね、日本人なり」

「え、本当に？ 本当に日本人？」

「はい、それに加えて米国出身、米の国ね、魚沼。美味しいよ、日本は黄金色の稲穂の国なりけり」

「どこのお人が判りませんが、ジュリア姉さんと一緒だね、顔立ちはギリシヤ人とイタリア人とインド人って感じがするけど。ロイドはこの国の

人？」

「安堂家に生まれし国の者です」

「日本か、じゃあみんな日本人だね」

ロイド、ジュリア、フランクは口々に言う。

「はい」

「ええ」

「なりけり」

皆はロイドのことをこんなにも把握しているというのに、僕のこととは誰も把握してくれていないんだな、と一抹の寂しさを覚えた。僕は本当はこの国の人間なんだろう？ 日本には日出ずる国としての誇りがあつたはず。しかし僕には日本人だったような記憶が微かにあるだけで、日から出ずつた記憶など無い。こんな僕には、日本人としての資格はあるのだろうか、心配だ、どうしよう、日本国籍を取り上げられてしまふ予感しか無い。怖い……

「僕は日本人ですか？」

「そうだよ、さっき言ったじゃん」

綾は脇にあるベッドの上で飛び跳ねる。

僕は日本人なんだそうだ。本当かな。全くそんな気がしないけれど、今のところ現状では僕を日本人と言う人しかこの場にはいないみたいだ。それが真実かどうかはともかく、そんな風に僕の不安を無下に否定する人々しか僕の周りにはいないなんて、情けない。僕のこの悲しさは、誰からも理解してもらえない孤高の存在につきもの。岸壁に立った咎人が、今にも飛び降りようとしている訳だ。僕はなんで生きてるんだろう。

「疲れた、眠るよ」

僕はこの世の敗残者で、一刻も早く死んだほうがいい。悲しみに包まれて泣いていると、眠気の気急さはさらに体全体を包む。辛く苦しい世界のこゝと、弱った心、どこを向いても目に突き刺さるギラつく蛍光灯の悪魔の光、それを手のひらで遮り、轟々と音をたてるエアコンと、ビョウビョウと鳴り響く冷蔵庫の阿鼻叫喚の叫びに耳を塞ぐ。ああ、恐怖の屋敷、ここが地獄だ。人生最後の瞬間までこの拷問は終わることがない。永劫の業苦に身を焼かれる人生だった。また僕は死ぬのだ。大多数から責め苦を負わされる役が始まる。僕は咎人。誰からも後ろ指を指され、生きている最中ずっと爪弾きにされる。輪になった咎人の群れに加わらされて、巨大な重い石臼を回して廻る。足首には鎖と、重くて持つて走ることもできない棘だらけの鉄球だ。僕は人間の尊厳を踏みにじる棒で小突かれ、転げ回らされる。熱い、灼熱の砂が敷き詰められた床は、足裏だつて耐えられないほどののに、転げた僕の柔肌を容赦なく火傷させてくる。地獄に人権があれば良かったのに。人に人としての価値が無いこの世界。戸惑いながら臼を回す。歩いてても歩いて拷問は果てしなく。永劫に継ぐ永劫、拷問に継ぐ拷問の果て、僕は息をする事も出来ず、立ち竦んだまま息絶えていた。

と、気づくと、永劫の苦行は終わって、新たな命に目覚めていた。僕は神

にもなったし悪魔にもなった。それを味わい尽くして、水害に溺れ、火災に焼かれ、全身を粉に砕かれ、馬のいななきに鼓膜が破れる思いを繰り返し味わわれ、死んだのだった。虫になった気持ち、踏み潰され踏みにじられることを繰り返し、生きていても仕方がない気持ちを味わいながら、朝、目が覚めて生まれ変わる。虫だ、カフカだ、人間は虫だった。蝶の夢より気の毒な嘔吐、嗚咽の中に閉じ込められたかつて人間だったもの、頭が痛い、早く誰か殺してくれないか、誰か助けに殺して、安楽死を、早く。

「おはようございまーす」

ああ、誰かが僕を助けに来てくれた。

「サツキですよー、秘書のサツキですよー」

誰かが僕を殺しに来てくれた。

「サツキですよー、先生ー？」

僕は身動きが取れない。体は眠った時のまま微動だにしない。意識があったからと云って人は行動できるとは限らない。指一本が地球より重い、瞼一枚が宇宙より重い、世界なんて壊れてしまえ。

「てりり先生、どうされたんですか、また意識が体に閉じ込められているのかな」

人間の屑しかいない世界に生まれて何故生きていたいと思えるだろう、生きていてほしい人間のいない世界で、ミミズは体を侵し体内に巢食って這いずり回り、身体中を穴だらけにする。僕はもう生きているとは言えない、それでいて死ぬこともできない、地獄の地球の住人だ。腕や足は付け根から痺れ、いつ丸ごと腐り落ちてもおかしくない。体が離合集散を繰り返す。喉に息が入らない。

「先生、そのままでもいいですからね、私が体の位置を治します、頭の上に両足が乗ってその上に肩と腰があるし、それを両腕が巻き込んでるから、直さなくっちゃ」

絶えざる苦しみ、死なせてください。

「先生はこんな格好でどうして生きてられるんでしょうね、普通だったら生きられないですよ」

顔をハンマーで殴られるような痛みが何度も起こった。背骨が折れる痛みと、骨盤が割れる音も絶えず聞こえた。僕はもう人間じゃないんだ。壊れた只の物質だ。

「治らないな、ちょっと直せる人を探してきますね、誰かいるといいんだけど」

サツキと名乗った人はぐしゃぐしゃになった僕の体を丸めて捨てた。

やがて意識は閉ざされていく。夢が始まる。

寿司、すき焼き、天ぷら、食べ放題。また、自分の体が大きな大きなお相撲さんになって、幾らイクラを食べてもお腹いっぱいになるということが無い。最高の体、魅惑のボディ。しかも夢なので健康リスクも幻にすぎない。食べても食べても胃もたれしないし、美味しさを味わい続けられる最高の体

だ。いくら、まぐる、サーモン、うに、肉肉肉、野菜から何から全部の天ぷら、寿司の天ぷら、肉の天ぷら、なんでもかんでも天ぷらだ。僕の食欲はこうして満たされた。満たされた欲望は成仏し、大気となって地球に拡散した。僕のこの美味しさが、世界中の全ての人々に降り注ぎますように。

祈りと共に僕は目覚めた。生き返った。食べ物、夢の力、人が生き返る力、生命の神秘。僕には生きる命がある、生きているから生きるんだ。

窓を開け、声を大にして叫ぶ。

「生まれたぞ！ 僕は今！ ここに生まれ！ 息を吸い！ 吐いて！ 息をだ！ 胸の鼓動は速く！ 滾る血は熱い！ 不死鳥は天高く飛び鳴く！ 二度だ！ いや三度！ そして太陽となってあらゆる存在に力を与える！ 力は命だ！ 命は力だ！ 栄えよ！ 大樹！ 里山！ 海原！ 宇宙！」

窓の下から声がする。

「てりりくん、声が大きいわ、静かにして、ちよつと待って今行くから」誰かはわからないがまた誰か僕を知ってる人なのだろう。駆け出してすぐに玄関が開かれ入ってくる。「あのねー、下から見たら三島由紀夫だったよ」

「檄文か」僕は日本に思いを馳せ、次の瞬間すっかり猫の気持ちになって寝転んだ。「喉鳴らす僕の顎先撫でる手を舐めて返してゴロン腹出し」

「猫みたいに可愛いよ」

僕は人懐っこい気持ちで「ゴロンニャン」と目の前の少女に擦り寄った。果たして彼女は誰なのだろうか。少女は言う。

「今日はギューニャンは来てないの？ 一緒に学校に行こうと思ったのに」

「ギューニャンは来たのかもしれないし来てないかもしれない。たしかギューニャンは配達がある人なんじゃないのかな？」

「配達が終わってからあなたの世話をしに来てるかと思った、それから学校でしょ」

ああ、彼女はギューニャンの友達だ。違うかもしれないけど、そうかもしれない。確か名前は、えーと、なんだっけ。

「君ってサツキ？」

「え、そうサツキだよ、また忘れた？ 誰だと思ってたの？」

「取り巻きの誰かかなって。でもそれにしても馴れ馴れしい口調だったから、僕と割と親しい友達か恋人、あるいは妻、そして愛人、そういった類の誰かかもしれないと思っていたところだよ」

「あのね、私は、ギューニャンの友達だよ。サツキ、覚えてない？ 学校に行くから迎えに来たの。そしたらてりりくんが発狂して檄文をバルコニーから宣誓してたからビックリしたよ。よく来てるんだけど、本当に記憶がなくなるね、こないだは私を秘書にするって言ってたけど、そういう意味？ ごっこ遊びだと思ってたけど、もしかして本当に秘書と思ってる？」

「檄文って言うか世界の真理だよ、あと君のことはなんとなく覚えてる、着ぐるみ愛好家だったはずだ、そして君は僕の秘書、サツキ、うん、サツキね、また忘れてたら教えてくれ」

「また忘れちゃうのか、うん、わかった、その都度、教えるよ。ギューニヤンの友達のサツキ、クラスも同じだよ。着ぐるみじゃなくて仮装が好きな。熊のパジャマを着てたことはあるけど、そのことを言ったの？ 秘書はわかんないけど、いいよ秘書で」

「おお秘書よ、わが秘書よ、今日の僕の予定を教えてください」

「知らないよー、いつもいるんな人が来て教えてるじゃん、私は知らないからね」

「なんてことだ、僕は今日の予定すら知らされないというのか、サツキよ」

「私のせいじゃないよ」

「じゃあギューニヤンが来るまで眠ろうかな」

「来ないんじゃないかな、来るのならもう来てると思う、いや、やっぱり来るかも、てりりくんは心配な人だから」

「そうだね、来て欲しい」

「ちょっと見てくるね」

ギューニヤンの友達で僕の秘書のサツキはどこかへ行った。すると入れ替わりにスーツ姿の大人の女性がやってきた。

「先生、秘書のサツキです」

「こんにちは、君は秘書のサツキ？ 僕はてりり。多分。いやきつとてりり、だと思っただけど、本当かどうかは自信が無い。なぜなら僕はさつき少女サツキを見送ってギューニヤンを待っていた。すると秘書のサツキである大人の君が現れたんだ」

「私は秘書ですがさつきサツキが外に出ていくのを見ました。そして私はサツキです」

「どのサツキ？ 何人もいるの」

「私は一人で日本人です。ギューニヤンは私が中学の頃の友人ですが、先生とも親しいはずです。年齢は当時十二歳、現在二十歳」

「それは君自身のことと、そして君の友人であるギューニヤンのことだね、しかし僕の知っているサツキとギューニヤンは現在も十二歳なんだ」

「私の精神年齢は現在も十二歳です。ギューニヤンも同じです」

「そうなんだね、それはわかった。それはそれとして君は二十歳で、十二歳でもあり、さつき僕と話し、ギューニヤンが来るか見に行った上で、今ここにもいるんだね」

「そうとは思いませんが、そうかもしれませんね」

「ギューニヤンは村で牛乳を作っているかな」

「今ですか？ あれは夜中にやるものですよ先生」

「一般的に？」

「他所のことは知りませんがギューニヤンはそうしています」

「今日の僕の予定は？」

「今は病気で眠っています。そのままお過ごしください」

「ああ、僕は今、眠っているのか」

「はい、そして起きています」

「ふむ、じゃあそのことについてはそれでいいや。今日は好きにしたいいだね」

「夢の中の出来事ですからね」

「涙も涸れ果てたね」

僕は今日も眠っていなくちゃならない囚われの姫。誰か王子様が救いに来てくれたらいいのに。僕はいつまでも囚われたまま死ぬのを待ってる。あたりはいつの間にか街中で、空を見上げると雨が降ってきた。一滴一滴がポタポタと体にあたり、僕の体の中に浸潤して肉を穿ち、穢れた成分が体と一体になる。体が汚染されると共に心も汚穢にまみれ、死んでしまったほうが断然マシと思える気色悪さが脳の芯まで浸透し、汚染され、脊髄を経た後、血流を通して体中へと流れ溢れる。雨とはそんな毒でしかなく、一滴が触れた時点で既に死んだも同然なのだ。僕は吐き、吐瀉物にまみれ、転げ回って苦しむ。苦しみに耐えきれず意識が絶え絶えになり、やがて全く混濁し、意識は穢れた濁流から汚泥の底へと沈んでいった。

「てりり姫ー、てりり姫ー」

どこかで僕を呼ぶ声がする。どこだろう。誰だろう。姫を姫と認識できる人は世界でも数少ない選ばれた者だけだ。僕は姫。姫は姫。気高く、雄々しく、美しく、姫たる者、いざ戦いの地へと舞い降りん。

目が覚めると世界はまた代わり映えのしない僕の寝袋へと回帰していた。

「起きたの」

誰かがそこにいる。誰だ。わからない。けれど誰かには違いない。誰かしらがいることは重要なことだ。誰も居ないと、僕は今日がいつなのかを聞くこともできないし、そうすると僕はいつまで経っても今日がいつなのかを知ることも出来ないままなのだから。カレンダーを見る能力すら無い僕にとつて、誰かがいることは重要だ。それが誰かはさほど重要なことではない。そう、誰だっというんだ、どうせ誰であったとして意味なんか無い。人間には僕を人間扱い出来る人間性なんか無いんだから。

「今日のあなたの運勢は、大吉」

「縁起が良いね」

僕の脳から痛みが発する。目の前が揺れる。世界は震度六強だ。

「魔女の世界では、あなたを強運の持ち主として認定しているの。生きる価値の全くない星の下に生まれながら、それでも生きていけるといけるという運の強さを持っている。価値が全く無くても、あなたはあなた自身の力で生きていけるから」

目の前にいるのは魔女らしい。そういうえば魔女とも親しかった記憶がある。そんな記憶は今の今まで失われていたのだけれど。

「僕には生きていく価値が無いのか、それはきつと、行動による結果の出世なさ、のことなんだろうね」

「そう、あなたは行為主義に生きることが出来ない」

「そうか、そうだね。行為主義のカーストつてもものがこの世界にはあるけど、そういうものより人格のほうがずっと価値が高い基準だと僕は感じるし、何もできなくても人格が優れていればいいっていう価値基準で僕は生きていたい。他者から社会的に承認される行動を取れさえすればどんな層のよくな人間でいても平気で生きられそこに至れない存在を嘲笑うなんて傲った行動をとってしまう人たちみたいにはなりたくない、心からそう思うもの」

「あなたの価値基準は明示されてる」

「皆に愛される人であれば良かったな」

僕の世界、夢に見る世界。

「僕は確かに今ここにいます。この夢の世界、この現実世界、夢の中の現実、現実を生きる夢の世界で、羽ばたいて飛び立とう、宙を舞う鳶の羽根先のように、何よりも先立ち風切る存在でいたい」

魔女は僕をうっとり眺めながら見つめてくる。

「いい夢ね」

「それは虫の羽音くらいの心音で息が止まるような存在だ」

僕は椅子に腰掛けて珈琲を飲みながら語り続ける。

「村は焼け、畑は水没し、ダムは毒に汚染され、二度と取り返しのつくものはない。舞い踊る孫、撒かれた毬藻、牧場の茉莉子。みなし子、みじめ子、見捨てられっ子、緑の美智子。無一文で、無味無臭の、無垢で無知な無毛少女、夢霧子（むむこ）。面倒な子、目配せする子、メッキ塗れのメチルアルコール、妾の愛恋子（めぐこ）。問題無い問題児、モンシロ顔の餅餅女、もずく大好き木炭まみれ、木蓮の森の桃子。彼女たちの父親で母親で夫で妻で彼氏で彼女で兄で姉で弟で妹で息子で娘でペットで飼い主、それがこの僕、てりりな訳だが、人が人をおぶって山へ芝刈りへ、そこで下ろして洗濯へ、川で拾った桃を持って帰り、食べさせ、若返ったところで産まれた子たちがどうなったところでどうでも良い。虫に毛が生えたようなものだ。そんな虫は嫌だろう？ 嫌だろうから殺してしまえ。信長の肉を食べるのだ。嫌われる五人娘に蛇の肉を食らわせ、蛇の生き血を飲ませよう。血のしたたるようないい女、男の中の女、白魚の踊り食いをする女、女のようにだと女から差別される男、女なら病むのは許されるけれど病んだ男は許されないと病んだ男を差別し侮蔑し嘲笑する病んだ女、それをもるともせず病む男たちによる性差別を是正する運動、男女同権、諸行無常、病んだ男を愛おしむ病んだ女、対決に継ぐ対決、女豹対女狼、再会に継ぐ最下位で西海に至る空海、あんだ喰うかい？ アンパン食うかい？ 人事を尽くして天命を待つ、神社を潰して煎餅を撒く。遠からず、十カラス。闇夜のカラス、病み用の辛子。虫が死、無視が師。詭弁より花卉、早弁より哀れん。公共毒素の鳥居と舞にすべからく四十六波、もんどり打って頭突きで昇天、安楽にあんたら苦死、もう学問なんて書くもんか。散り散りに去って、地理チリに明後日」

「それが幻想に基づく現実という夢なのね」

魔女は天空から声を投げかけ消えていった。

僕の心の奥底に沈んでいく魔女や秘書たちの顔が今はもう思い出せない。彼女たちの世界は潰えてしまった。僕の中の思いが雲散霧消した時に、もう死んでしまっていた。無意味に御苦労、大樹の下で念仏、無益無明の霞が払い、一家離散の悲しみ銜い、曼珠沙華、ちんすこう、青椒肉絲の花が咲く。もう成り代わり、すり替わるのも祈念無想到断絶至り。いつか生きる価値が僕に宿りますように。手を伸ばすと世界は闇の沼に沈んでいる。空の向こうには、夜明けが待っていた。夜明けの向こうに、太陽が待っていた。

目が開かれる。朝だ。部屋には僕の寝袋と、中の僕。汗だくで仕事をする類人猿、奇っ怪、奇天烈、切手、蟋蟀、それ以外にも何か居る。見覚えのない可愛らしい少年。彼は茶目っ気のある色っぽい声で話しかけてくる。

「薙刀いりませんかー」

ああ、薙刀をがあれば様々なものを切れる、人参、大根、ごぼうに泥棒、人の縁、空間の淀み、心の闇、なんでも切ってしまうおう。

「ください薙刀」

「やったー、雇用成立」

「雇用？」

「私は薙刀、求めてくださってありがとうございます」

「君は薙刀なのですか」

「私は薙刀です」

人間にしか見えないが彼は武器なのだろうか。

「私は薙刀であり人間です。薙刀と言う名の人間であり、薙刀という武器でもあります。攻撃力は僅かです。武器であり人間です。名前は薙刀。名前が薙刀」

「名前か」

「私はあなたの秘書です」

僕には秘書が多くいるけど、また一人加わったみたいだ。

「フルネームは薙刀（なぎなた）なぎ。鉈風（なたなぎ）ナタとのコンビで世界を震撼させちゃうぞ」

色気たっぷりの少年、薙刀は、僕の膝の上に乗って甘える仕草を見せると、言う。

「人間五十年、あと三十五年、楽しい、嬉しい、苦しい、つらい、そんな日々が待っている、待っているからつらいんだ」

泣きわめき、すがりつく。足を絡めて擦り付ける。猫だ、この子は。猫じやらしだホイ。

「ふわ、またたび」

まぶしたものが何か気づいたようだ。やはり猫。

「これから僕は、秘書として、マネージャーとして、あなたに支えることを誓います」

「僕は、てりりだよ。三日月てりり」

「イエス、サー！ てりり！」

「あ、もうちょっと気楽にしてね」

「僕は！ 秘書として、サーカス団員として、鉈風ナタと共に、共に！ 尽力します！」

「そのナタというのは」

「はっ」

なぎは辺りを見回す。

「忘れましてー！！」

「忘れ物かな」

僕は寛大な心で許し、話を聞き続ける。

「そのナタというのは一体？」

「僕の双子の兄で、だらしないけど切れ味鋭いんです、行動によって担保されない鋭さがこんにやくのようでありまたこんにやくを切る刃物のようでもあり着物の薄絹を織り込んだ未知の宝石のようでもある、そんな弟です」

「わかりました」

彼の兄であり弟である存在は生きているのだな。しかしここにはいないらしい。どこに忘れられてきたのだろう、そしてどこへ行くのだろう。

「なぎ君、君の兄は今、とある国にいるね」

「はい日本です」

「その国は日本から遠く離れているよ」

「そうなんですか？」

「そうだよ日本だよ」

「日本から遠く離れた日本ですね」

「そう、そこは日本なのだけど、この日本とは限らないんだね」

「パラレルワールドですか」

「多重世界にいると思えば整合するね、でもこの日本なんだ」

「この日本ですか」

「そうだよ、そこは遠い地平の果て、日本から気が遠くなるほど離れているんだ。そこが、日本なんだよ」

「日本ですね！」

「日本だよ」

日本にいる彼の兄を探すため、僕は決心した。全身全霊の宿る薪を割り、火に焼べ、名指しで頬を擦ると煙が立ち込め火がついて、爆弾バンボン灼熱ボンバン、火を見るより明らかな赤、熊ん蜂のリズムでおどける太陽、恒星、惑星、宇宙の神秘。灼熱、爆熱、リズムの神秘。律動、陸橋、ランチのタイム。タイムランナー請われて走るよ、壊れては知るよ、限界突破。有名税、夢で払ってる。いいよ、もう少し狂ってく？ お互い様のオタマジヤクシで水金地火木土天海、冥府まどろむ十四松、迷夢マドロス四十雀、どんどんちきち、どんちきち、どんどん敷地、盆地基地。ボン知己地位、とんち既知。波の中で踊る、不意、ストローク、ストローム、ストライク、ストローク食う。シュトロハイムにシュトックハウゼン、ストック這う禅、ストップ雷

電。為右衛門、食べるレモン。恫喝、生きているから食べるんだ。土左衛門、どうだ伊右衛門。恐喝、生きているから眠るんだ。

「オンコ口頃にお兄さんがいるよ」

「弟です」

「弟さんがいるよ」

「兄です」

オンコ口頃に時間を合わせて、向かうとするしかないようだ。

「オンコ口頃に向かおうね」

「向かいます！ 秘書として！ 兄、そして弟として！ それが秘書の嗜みです」

「そうだね」

オンコ口頃が何か誰か僕に教えて欲しい。僕にはそれが何なのかわからな。無意識に立ち込める緑の落葉樹、深海から醸し出す無数の毒蛇を乱反射して回転木馬。木綿の肌の触り心地は、絹に比べて負けてはいるけど、虫取り網には敵わない。そうして僕らはオンコ口頃のスカラシップをとって、麒麟岳へと踏み入っていったのだ。

「なぎ、前が見えるかい」

「てりり先生の背中が見えます」

「僕は君の後ろにいるよ」

「僕は後ろ向きに歩いてるので正常です」

「僕も後ろ向きで歩いてるので正常だ」

後ろを向くと、見つめ合う二人。僕たちはきつと仲が良い。うぐいすの鳴く世界の崩壊へと向かって、後ろ向きで歩き続ける僕たちだから、きつと世界は崩壊しないんだ。

「てりり先生、発見発見僕の家です」

「なぎの家かい」

「いいえナタの家でもあります」

「少しはなぎの家かもしれないよ」

「少しどころではないんです、先生。僕の家だけれど、僕の家ではなくて、なんて言ったらいいんだろう、難しい、もどかしい、僕は権利を持っていますが、僕だけの家ではなく、ナタの家でもあるし、それ以外の何名かの家でもあるのです」

「相続でもしたのかな」

「そうだとすると理解しやすいですね」

「おお賢者よ、土地と建物の所有者の違いを無くし一括した管理をもたらし給え！」

「願いに感謝を！」

「ナタを探そうか」

「ナタならここに居ます」

「どこ」

家の中を指差すなぎ。では扉を開けるとしようかしまいか、悩みどころに座りどころ、歩いて入るか走って入るか、ええい迷いよ晴れよ、開け胡麻！扉を蹴破り中に入るとそこには干からびた動物が。

「穢れた物の内にある望みよ、ここに具現化せし干物、蘇れ」

カップに干物を入れ、お湯を注いで三分待つと、干物は膨れ上がり、立派な人間になった。なぎが叫ぶ。

「ナタ！」

鉦尻ナタの再誕だった。

「んん、生き返った気持ちがある」

「どこに行ったのかと思ったよナタ」

「なぎ、こっちきて」

二人は抱き合った状態からさらに力強くハグをすると、ペロペロと互いの傷跡を舐める。体に傷は無い、心の傷を舐めるのだ。心の傷は口にある。

「ねえ、ふたりとも、僕の秘書なの？ てりりの家来？ 召使い？ しもべ？ おしべ？ めしべ？」

「うんそうだよ、僕たち二人とも雇用関係にあるんだ。ねえナタ」

「やあ、てりり。僕も雇ってってくれるんだね。なんでも僕こと鉦でストーンと落としちゃう」

二人はペロペロと心の傷を舐め合ってる。

「僕の賃金は僕の愛だよ」

「それはいい」

「それでいい」

「それがいい」

「それもいい」

そうして二人はペロペロと舐めあいながら、僕にかしづくのだった。

※

はっ、と気づくと、布団の中だった。布団の外にはお話にならない卒塔婆兎が三匹跳ねていて、駱駝が駆けずり回っている。始終闇雲に手足を伸ばし、避けてはうねる波のごとく、交わす体もドタンバタン。返す刀で脱出地獄。嗚呼、叫ぶ怪鳥、帰る小学生。叫ぶ雛鳥、帰る母親。沖繩の沿岸に漂着した蝙蝠が、鼻ヶ森の奥地へと帰りがっている。帰る小学生、帰れない蝙蝠。猿股ジーンズの流行、ふんどし自転車の産卵、この世はもうおしまいだ。ガラガラと崩れ落ちる天空の切れ目から神が覗き込む。僕は言う。

「個人的な恨みで世界を滅ぼすな！ 大蛇よ、老婆よ、神を引き裂け」

繊維に沿った切れ目から綺麗に引き裂かれる神はスライドして言った。

「瑠瑠の鍋に気をつける、奴らはレンジでチンできない」

「安心しろ、うちにあるのはレンチン調理の器具だけだ」

「その言葉を聞いて安心した」

神は裂け、成仏した。極楽浄土で安らかな気持ちを抱き、この世の一切を忘れ、忘我の極みで尺取り虫になるのだ。

「ふう、神め、恐ろしい敵だった。だがしかしこの世には第二第三の神が現れる、気をつけなくては」

言うが早いのか、金色の鉄仮面、金のメッキの剥がれ痕がトレードマークのニューフェース、新たな神が現れた。天空のそのまた上の空間を引き裂いて、ガラガラガラとやってくる。股引の猿股は、自転車母子の亀饅頭だ。どんだん、どんがらどん、亀饅頭猿股を履いた股引は、自転車親子へと突進する。それは神であり母子でもある。無邪気に気取った子が神に噛み付くと、母は言った。

「神様、明日のうちにこおろぎが揚げられて、もう三日もおでんが食い放題、一体どうしてくれるのさ」

神は答えた。

「おでんはもうずっと食い放題、しかしその傾向もじきに止むであろう」

そして天気を予報し、宣伝をして、アフレコを終えて帰る神。母は子に言う。

「明日になったら高利貸しの氷菓子、食べられるって」

「母さん、神様はそんなこと言ってなかったよ」

僕はその光景を見つめる。なんだか清々しい気持ちだなあ。レンチンパツクの神はそんな僕を飲み込んで、レンチン地獄へと誘い込んでいった。

※

てりりが目を覚ました時、そこは布団の中で、世界は日常へと回帰していた。ここがレンチン地獄だろうか。いいや、レンチン地獄とは何だ？ そんなものがあるとは思えない。信じられない思いを抱えつつ、無邪気な赤子のおんぶ紐を口に咥え、颯爽と階段を猿滑り尻もちドタキャン宙返りからの着地で地底に降り立つと、ふとした仕草からモグラは目を覚ます。這い出てくる地中のモグラ人間、穴を開けた鶴橋の手元が狂いゴム毬を突いた弾みで仰け反りステップ踏んでランチタイムへ。もうここは戦場だ。怒り狂った目玉の奥で隠された妖精が怯えている。

「やめろ！」

叫んでも誰にも届かず、もうここは楽園、血の底、夢の国、山に掘られた殺人被害者の遺棄場。帰りたい。堪らず僕は語り出す。

「不眠不休の失われた場所へ。紅月からの損傷に不揃いな海鮮心情出鱈目道中、落款の落ちた書画にだいだらばうち、ぬかるみに篝火、足軽に力ササギ、今夜不撓の曼珠沙華。見える間に傷跡、独逸に髭の下の舌、ずり落ちる足跡に即身仏の干物から作った薬の効能、夢に見る豚、あくせく働く熊、ニシンの煮付け、煮凝り、煮付け、煮干し、また煮付け。無感動の果て、夢の荒野のビル頂上で、安らかな崩壊、落下と龍、速やかに傾く、網膜の隙間から蓮華畑の大盤振る舞い。申し訳ないマサカリに、冷えたタンポポおひたしにして、歩いて座る、回って呻く、唸った先には沈丁花。蜜柑を食べながら舞い散る落ち葉を踏んで、僕は安らかな寝息と共に、ぬいぐるみの熊太郎を娶り、財布から聖徳太子、新渡戸稲造、夏目漱石、などの旧札を出すと空へ

放り、あまつさえ閃きの彼方から持ち出した餅、揚げて天ぷらに、アイス振り掛けて、ぺんぺん草をまぶして頂いた。魍魎の夥しい毒気を吸い込んで、『軟弱者！』と呼んでは返す虫の息。『お母さん！』呼べど返事なし、犬の寝顔に敵うもの無し。虫が鳴く。虫が鳴く。虫が」

※
はっ、と気づいたときにはまたも布団の中だった。本の角が四角、ロジックの四角に木箱の四角、迎え撃つ鞆、外套も四角。角ばった外套の裾も四角。向かい合った楽器箱、四角、四角、四角。隣り合う靴箱も四角、四角。眠い気持ちにすっかり侵略された。僕は誰だったのだろうか、僕は。僕は僕が誰だったのか忘れてしまった。僕がかつて僕だったとき、僕は僕を僕として僕だろうかと思っていただろうか。僕が朴訥にも牧草をボクボク食べていたからって、僕にとつての僕と僕らしき僕は同一化されることもあったかもしれないし、それによって僕らしき僕は真実僕である僕によって駆逐されることもあったかもしれない。そんなことだって僕は僕寄りの僕にとつては僕だから、僕までもが僕によって僕的に僕と僕への僕まみれの僕で僕が僕だったことによる僕への展開を僕僕からして僕たらしめているに違いない。そう思った時、僕は僕として完成し、僕が未僕であった今この時までをも、過去のこととして断絶の極みに達することができたのであった。

※
ここは夢の中なのか、今は夢なのか、どのような夢か、どなたが夢か、夢になったのか、何故ここが夢で、どうやって夢か、迎えが来ないと判らない。僕はいつか、てりりと呼ばれる人だった気がする。けれど今、僕はもう僕ではなくて、育ちの悪い羊によって食べられた狼でしかない。気持ちの悪いエピタフは、エビフライの衣に包まれた。もはや猶予無く、僕たちの世界は知性の外へと存在させられてしまったのだ。

※
目の前に広がるのは無限の白い地平。足下にも何も感じない。宙に浮いているのか解らないが、少なくとも足裏には何も感じない。世界が無い状態に陥ってるのか、僕の脳や知覚が何かを感じるに至れないのか、不思議な心境だ。不思議な心持ちだ。心の在り様が僕のことを形作る。僕には世界が感じられない。もはや世界なんて無い。何もない世界で、何もないままに、何かを思おうとしている。僕にはトム・ソーヤーのような冒険も無ければ友達のハックルベリー・フィンも居ない。誰にも何も解らないし、誰にも何も伝わらない。荒野で一人、僕が何をやっているのか感じ取れる程度の知性で見識を持った心ある存在を探し続ける。命の根源、命の源泉、湧き出る魂の芳醇さを浴びて生きていけるようになりたい。人が人として生きていられる状況の維持、明言された魂の肯定。詳らかにされた先導者たちの現実と、反抗者たちのつまらないくだらない妄言。世界が反転する。

※
僕は誰だったのだろうか。僕はてりりだったはずなんだ。けれど僕が何をし

ているか、今は僕にもわからない。世界は終わってしまったから。

「誰がいるかー」

廃墟と化したこの世界で、僕は彷徨い歩いている。おかしいね、不思議だね。脳が壊れた痛みを感じる。僕に世界はもう感じ取れないのだろうな。鼻の引き倒して僕自身の体内に毒素が注入されて、人気の無い楽園に放逐されたみたいなものなんだ。僕のことなんか誰も知らなくて、いいや知ってても無視して、生きていられないようにしてくるだけで。僕の首はひたすらに痛い。僕の嘔吐の気持ちが目一杯そこから注入されてる。怖い怖い。そんなことで人は死んでしまうんだ。生きていたい気持ちなんか、一欠片も存在しない。それでも生きていかなくてもならないなんて、つらすぎる。酷すぎる世界。つらすぎる世界。僕の首はどうしようもなく脳天まで痛みを響かせて吐き気をもよおさせる。こんなことで人が生きていけなくなるのだから、人間の体なんて、ちょっとしたこと永遠に価値を失わされてしまうんだ。

「秘書やーい、誰かー、僕は今、歩いている、誰か僕を見つけてくれないかー」

僕の眩暈は止まらない。脳髓から巻き起こる振動、震度七の揺さぶり。我先に駆けつける荒野の虹の蒙昧なる命脈の山脈の動脈はみやくみやくしいみやくり気によって毎度毎度お騒がせされるのだった。みんな思っているような、ろくでなしのロクンロールは落伍者用の落花生によって示し附けられ、カリカリのカリウムによって気色ばんだ老老介護のお礼参りに豚草は祀られ、ニクロム線が放射状に裂け続けていった。神棚の大麻は神宮に向けて飛び立つ。そんなことないと怒ったり怒られたり。てりりは、て、てり、てりりは、僕は、大変なことに気づいてしまった。なんと書いても世界は終焉を迎えた。迎えつつある？ いいや迎えている。よくよく見知ったこの世界だって、てりりの周辺には数千人の秘書が居るだけだ。

「みんな、どこに居たんだよー、寂しかったよー」

仮面を外した犬たちだって、コリーやテリー、タリーやペリー、そんな名前前で呼ばれていたんだ。みすばらしい身なりは仮装に過ぎない。なまめかしい視線も飾りに過ぎない。化粧毛だらけ猫墨だらけ、暴走する衝動の奔流は流れて消える。まばゆい輝きも外連に過ぎない。纏わり付く体液も血糊に過ぎない。もどかしい傀儡も人形遊びに過ぎない。それが世界で、山で、箱で、内部空洞説なのだ。おかえりよ、おやすみよ、水迸る熱い冷気に当てられて砕けた硝子の格子を噛んで、逃げ出して、踊れよ人生、廻れよ長老。彼岸花の咲き乱れる今この地の僕は、もう足も砕けてしまった。爪も拳も砕けてしまった。湧き上がる間欠泉の湯が百度を超えて、宙空へと消えゆくまま空に霧が出てそこに虹が架かりオーロラの最中のブロッケン現象で巨大な人影には後光のオーラが光り輝く。それこそが彼の王子、高潔で名高い、てりり皇子なりけり。素晴らしき哉、こそばゆき哉。紅蓮の炎が柱をあげ、パイ口となって撃ち鳴らされる。申し訳ない、そこに愛はあったのだ。悩んで、苦しんで、得た答えがこれだ、この平和で最も嬉しい楽園なのだ。死してい

った者たちよ、許せ。生者の世界は今後も続く。怨念よ打ち払われよ。悪の思いよ振り払われよ。今、君たちはキラキラと光り輝く水に乗って、聖者の魂へと吸い込まれていった。これにて魂の浄化、燃やされてラッキー。ハッピーハッピー清廉。輝ける魂の勝利につき凱旋門、雷門、ブランデンブルク門を通り抜ける権利を晴れて得た、そんな憂鬱千万な男、てりりの幸福譚でありましたのでした。

※

はたと気付く。僕は、てりりだと。そしてここは寢床で、僕は眠っていたのだと。夢だった。全てが万事解決したかのような気がした冒険は、自分の夢だった。僕には数千人もの秘書はいない。十人くらい居ただろうか。それすらもあやふやな僕の記憶。

「おーい、秘書やーい」
呼んでみた。

「はーい」

「はーい」

「はいはいはーい」

などなど、様々な声が各地から聞こえてきた。よかった、自分は一人じゃない。

「ギューニヤン、いる？」

「ギューニヤンいるニヤン」

よかった、牛乳をくれた。

「ジュリア姉さん、いる？」

「いるいる」

アメリカ土産の自由の女神像をくれた。

「サツキ、いますか？」

「うん、いるよ」

十二歳のサツキがギューニヤンに駆け寄る。

「あとその他の人たち、いますかー？」

「その他とはなんだ」

「そうだ、そうだ」

「ごめん、存在を忘れてしまって」

「ひどいよ」

「僕は何もかも忘れてしまうから」

「そうだったね、何もかも忘れてしまうんだよね、てりりは」

「うん、記憶が保てないから」

「しょうがないんだよね」

「うん」

「わかったよ、てりり」

「ありがとう、なまえのわからない君」

「どういたしまして」

こうして、僕の秘書は確認された。解った存在、解らない存在、いろいろ居るけど、とにかくにも秘書は秘書。僕の味方だ。雇われてくれているんだ。僕はお金を払った記憶も無いけれど、彼らも人間、生きていかなくちやならないんだから、払われずっぱなしというままでは居ないだろう。きつと彼らは大丈夫。僕もあなたも大丈夫。

安心に包まれて、ほっと息をついたその時、突然！ 山が崩れ、海は裂け、海中のクレバスに地上の山が吸い込まれ始めた。大変だ。地球がさらに丸くなってしまおう！ 完成度が高まってしまおうよう！ 恐ろしい。ああ怖ろしいことが起き始めてしまった。てりりは一体どうなることか、僕は一体、どうしてしまふのか。それは簡単、調査に行きます。どうなったのかを調べます。知識欲があり、暇を持って余しているてりりだからこそ、心易い秘書にプライベート潜水艦をチャーターさせます。そんなものがあつたのか。

「秘書のロイド君、安堂くんだけ、海中に都市を建築しなさい」
「御意」

僕の意のままに海中に都市は建築される。海底にそこまでの価値はあるのだろうか？ ある。僕が夢見たからだ。海底に存在する魚を採る夢。龍宮城の男姫様（おとひめさま）になるのだ。二十一世紀末の世界を征服する悪の秘密結社を作らねばならぬ。金閣は、銀閣と共に猿に倒されねばならぬ。

「秘書の中に猿の方はおられませんかー」

「猿はいないよ」

「居た気がするんだけど」

「どうだったかねえ」

無意味な哄笑に笑いかける自然食品。

僕は言う「奉る。目くじら立てる暇があるなら跳梁跋扈の仇討ちなどし

て、親の血肉を備えて祈れ。マシン語は堪能か、いつ覚めるとも知れぬ眠りから今日は解き放たれて、お祭りだ、蒟蒻だ、食べて吐いて、食べて吐いて、飲んで食べて吐いて吐いて、臓物を吐ききったところで美味しい混ぜご飯を詰めて煮ます。調理が終わったタイミングで丁寧に彩りを添えて出来上がり。漢方薬を混ぜて、あなたの大切な人に食べさせます。あなたの大切な人があなたを好きだった場合、このおまじないは効果を持つでしょう。あなたの大切な人があなたを嫌っている場合、おまじないは無効となり、あなたの大切な人の食欲を満たすばかりです。それが一体何かと言うと、人によって効果は違うのですが、何もかもが幻想だ、という幻の覚醒によって、あなたはいつもいつでも人から愛されるようになるのです。股引、履いてますか？ 履いてみましょう。ストッキングでも猿股でも百日紅でもいい、去る去る詐欺のストーカーになって、逮捕され懲役を受けてみましょう。そんなことをしてはいけません！ 謎の効力を持つ独立独歩の肉食恐竜へ、祈ることを忘れずに。論外の香料によってむくつけき大男、実に屈強な肉体が、たった一発の銃弾に倒れるばかりの不条理をもろともせず、あなたは返り血を浴びた上で世間様に詫びを入れるでしょう。落伍者としての自覚を求める

人々を蹴り捨てて、雛鳥を大事に育てましょう。それが火の鳥です。炎の鳥です。光り輝く赤き火は、透過光を伴ってあなたを天へと巻き上げるでしょう。緋色は証明されるのです。おお、神よ。ああ、神よ。人形遣いによって操られるあなたの運命を僕の心の内から魂の混沌へと引きずり下ろしてください！　どうか！　神よ！　神よ！

「あなたの神は三番目ですか、四番目ですか」
「誰だ」

「あなたの心の内なる神です。プロテスタントなら解るでしょう」

「プロテスタントではない、プロのテスト筆筒アーティストだ」

「では解らないでしょう」

「それについてどういう見解を持っているというのか」

「会話が成立するには、双方の知能指数がある程度の範囲内に無ければならないということです」

「人について講話を求め、その心根は人間そのものぞ」

「神は三番目ですか、四番目ですか」

「知らないものは知らないと言っておこう」

「それがあなたの答えか！」

我々の見解は相互に瓦解した。無情なる口論によって得られたのは、時給三万円と五万円分の証書、および石油の採掘権と、それに伴う無料の掘削機レンタルカードだ。我々は海に潜って都市を建設した。あり得ないことだが、我々は工夫された努力によって、それを実現したのだ。

「僕の名は、てりり。この海底都市を建設した男。いいえ男姫様です。皆の努力、ご苦勞に存ずる。それにつき、褒美を採らずぞよ」

「おお、てりりさま、男姫様、わたくしロイドめに褒美をお賜り下さるとは！　では遠慮無く、吾輩は米の国が欲しいでおじゃ候なりけり！」

「うむ、採らそうぞ、採らそうぞ」

「わーい、吾輩、嬉しみの極みでおじゃる麻呂」

「喜びありや、喜びありや」

この僕てりりがてりりという存在に産まれて、初めて行った善行であった。しかし人の道は世知辛い物。安眠枕を高くして首を捻挫することなど厭わず、てりりの善行を心ないものとして寝ながらまでも罵る者まで現れた。産まれたばかりの婆様が叫ぶ。

「五臓六腑に染み渡る酒よ、臓腑を腐らせた後、そこに生クリームを詰めるのだ。そうして生クリーム大好きな幼児たちに好きなだけ食べさせるが良
い」

吐き気をもよおす悪魔の叫びだ。地獄の鐘が鳴り、業火が水中を焼き尽くす。水中の都市が、水中の街が、水中の村が、焼け焦げてしまう。それを猟師が鉄砲で撃つてな、アバンチュールをバケーションしていた男女と男女男と女男女と女男がジョーダンにのし掛かる。水中を見下げる地上の者たちは、中が煌々と照らされてついのぞき込むと、悪魔の叫びをまともに聴いて

狂ってしまった。眠りながら寝る兎、眠りながら走る兎、眠りながら跳ねる兎、そしてついに登場した眠りながら働き、食べ、排泄し、繁殖し、何もかも眠ったまま完了できる新生物である兎の態をした兎に非ざる謎の兎、非兎が、登場してしまったのであった。

「やい、てりりの秘書のものたち、今すぐ僕の言うことを聞きなさい、非兎を食べたいぞ、採ってきて今夜のメインディッシュにするのじゃ」

「ははっ」

僕こと、てりりは、世界を滅ぼす気になった。世界の非兎を虐殺して絶滅させるのだ。そうすれば人間の世界は幸福で楽園でいられるのだ。これなのだ。それなのだ。どうなのだ？ いいのだ、いいのだ。世界は非兎の物。それを壊すのだから人間の為になる。落書きだらけの舗装道路を、叩いて砕いて潰して壊して、非兎のために心なきセカンドオピオーン、主治医は信頼されないことに泣いちゃってもう治療不可、別の病院に転院してもらわなければならぬと通告されたことで患者は逆上、主治医はあえなく撃ち殺されてしまったのだ。これを知ったてりりは放って置けず、芋虫を大量に患者に与えた。エンドウ豆と間違えたのだ。与えられた患者は間違えて食べ、吐いて死んだ。勿論世界中の魂から敬遠され、吐いたまま死んだ魂と主にくっついて、未分化で半端な魂として再生の機会を得られず、後回しにされてなかなか目立つ活躍も無いまま転生の機会もなく忸怩たる思いをしていた。見向きもされない胡乱な魂。燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや。情けない。みつもない。そんな程度の人間でいてどうなるというのか。

「ギューニヤン、明日の分の牛乳を花に巻いてきてくれないか」

「ギューニヤンわかったニヤン」

何も考えないままにいる僕の心の中に起こった焦りがじつとりと背筋に汗をかかせる。嫌だ、何も考えないでいられたらいいのに。街は匂いに包まれてパチパチと火の粉が飛んでくる。そうだ、ここは火災の真っ最中、海の中は火の海だったのだ。僕は秘書と秘書と秘書を掴んでほかの秘書に声をかけてメイドやら運転手やらを呼びつつ脱出を図った。もう生き血を飲む必要があるまい。水を押し退ける反重力装置による心の壁を切って、海底都市を水没させよう。それだけで都市は消火される。その代わり街はもう二度と街として機能しないだろう。僕にとって世界はもうこれでいいものなんだ。僕が僕で在らねばならない理由などきつとなかったんだ。無常感に包まれて、僕は木立を薙ぎ倒す。

「あっ先生、勿体ないですよ」

僕だっってこんな事したくは無かった。毬藻で冷やされた海底が氷をひっきりなしに食べ啜えて南極から運んでくる。氷をかけて重力をバリアを心の壁を取り払って街は水没した。浮上。世界は各地から進化を続けている。何も無くなった世界だっって愛おしい物なのだ。僕でも誰でも、いい加減な気持ちでいては生きていられなくて、何もかもどうでもいいなんてことも無くっつて、これからも生きていくことが必要とされる世の中なんだから、僕でも誰

でもいいことずくめの思いをしながら、なるべく生きていきたいよね。そんなことを言いつつ、僕のお焦げの間から、美しいお姫様が誕生していた。茶碗一杯の質素な美人。美しいけれど、あっ、黒猫に取って食われた。黒猫は、三日月という名前なのです。三日月は、てりりの飼い猫なのです。ある時てりりの家の玄関にやってきたのです。それが奇跡だったのです。てりりの家、つまり僕の家に行ってきたということは、僕にとって嬉しいことだったのです。僕がどれくらい嬉しかったかと言うと、世界が変わるほどの嬉しさだったのです。世界は色づきました。彩りました。三軒茶屋にトマトが降りました。良いことばかりです。僕の家には柿の木が、枇杷の木が、何も無い世界がやってきました。もうお終いだ！ 落葉樹が消えると共に、世界は安全地帯から抜けきってしまうのだ！ 大仏に祈ろう。天地を取り替えよう。ひねもすのたり、叫んで眠ろう。眠りながら叫ぼう。寝言は大きい方がいい。そんな思想を汲んで、大仏は立ち上がり、日本列島を踏み潰して廻ったのでした。踊ろう、回ろう、踊ろう。大仏にできたことなんだから、僕らにもできるよ。僕たちの心の中なんて、いつだって楽しい事ばかり。いつも夢見て世界から世界へ、仲良しから仲良しへ、みんなで踊ってバターになるう。思いの丈をぶつつけて、クレヨンとパステルの戦いを見守りながら、みんなでおしるこしよう。それが世界の理。大樹信仰なのです。今やつと世界中を見守りながら、いまでも面白いことをしようとか、いつだって楽しく過ごしたいとか、迷惑かけながら頭のおかしな紳士淑女の思うことを書き留めるだけで報酬を貰って、生計を成り立てたい、などと思う間もなく寿命がやってくる、そんな人生なのでした。もう嫌だ、もう沢山だ、乳母車に乗っかってカーレースを試してみたい。僕の足の裏をくすぐる少女を引き離してしまいたい。僕の魂の果てに鼻を倒してまわり、愛好家の怒りを買って、報復されて死にたい。そうして僕は鼻になって、飛ぶ鳥を落とす勢いで鳥のまま落とされたい。だから死にそうな思いをしながらも、百円拾って巣に持ち帰り、かいわれ大根を加えて巣にしようような、そんな燕として鼻になりたい。機敏な動作に裏打ちされた、みっともない硝子の仮面を割り、素顔を曝して生きていきたい。木綿の豆腐は好きだけど、絹の服のがよっぽど美しい。そんな心で生きていきたい。木菟じゃないんだ、木菟じゃだめなんだ、木綿の鼻をまたいで、カオスシンドロームの最中へ。蒙昧なるむくつき豆腐。それが必要なんだ。馬鹿なことを言っただけで早くお残しよ。さつさと残したら、ほれ、赤坂警察で捕まった犯人の人權を救ってきてあげなさい。警察は人間を人間扱いはしないよ。犯人が人間だからって、犯人だから人間扱いしなくていいって思ってるんだから。対外的には違うと言っただけ、そういう心根がなくなっちゃ犯人を逮捕したいなんていう熱心な気持ちは産まれないんだからそういう気持ちを持っていていいんだよ警察官は。本当はだめだけど。でも人間に人權があるってこと、役割上の関係性の人間はとても好きなんだけど、役割上の関係性のある人間は役割上の関係があるから忘れてしまって、人間を人間扱いしなくなるんだよ。だって犯人は人間じゃない

から。犯人は犯人なんだから。そうして僕たちの世界に踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なのに見るだけで済ませるやつは利口に立ち回れた訳で、警察からの被害を受けず、踊った阿呆は犯罪者として阿呆で済まされず処罰されるという訳さ。狂った世の中だ。僕たちはそんな世の中を嫌って人間さよなら同盟を作った。鯨、鼻、美味しい豚、から成る世間体に気を遣わない団体だ。人間にさよならを告げ、人間を食べる機関が作られた。管理社会だ。イルカも人間を管理する。鯨と大差ないから問題無いんだ。そうして人は食べられるんだ。狂気の文言なんだ。ご神託はここに含まれているんだ。そう悟った僕は、自分がてりりだったことを自覚した。世界はガラガラと音を立てて崩れた。そこには一点の光も無く、ただ虚無の暗闇があるばかりだった。

※

「返して！」

気付くと僕は、寝袋の中に居た。自分の部屋だ。さっさと死に絶えてしまえたら良かったのに、今日も僕はまた目覚めてしまった。眠っている最中に壮大な冒険や思いあまった行動や居た堪れない思いなど数限りなくした気がする。けれどそれが何だったのか、今は一欠片も思い出すことができない。僕は牛乳が飲みたくなった。

「ギューニヤン、牛乳にゃん」

秘書で牛乳配達戦士ギューニヤンを呼んだが返事がない。僕は心配になってギューニヤンの部屋を見に行った。ギューニヤンの部屋はもぬけの殻だった。

「ギューニヤン……？ どこに行ったの？」

家中探した。ギューニヤンの姿はどこにもない。

「ギューニヤン、ギューニヤン」

僕はおるおると、よるよると、くずおれながらギューニヤンを探した。家を出て、街を彷徨い、人間の居る場所全てから墓穴まで、至る所を探した。けれどギューニヤンは居ない。街の人たちも自分たちの牛乳を用意してくれていたギューニヤンが心配で出てきてくれた。探してくれた。

「ギューニヤンやーい」

ギューニヤンを探して僕は外国までやってきた。ギューニヤンは牛乳配達用の空飛ぶ絨毯があるから、外国まで来てしまったのかもしれない。砂漠、山、海、探した。地中、海中、空中、探した。居ない居ない居ない居ない居ない居ない居ない居ない、居な居な居な居な居な居な居な、ああああ、ああああ、ああああ、ああああ。もう嫌だ嫌だ、ギューニヤンがいけない世界なんて嫌だよ、ああああ、牛乳が飲みたい、牛乳が飲みたい、ああああ、ああああ、牛乳だよお。

「うおおあああ、牛乳ギューニヤン、ギューニヤン、牛乳ううう」

「ギューニヤンにゃー！ 牛乳ギューニヤンにゃー！」

叫んだら、答えがあった。その声は宇宙から降ってきた。

「ギューニヤン、キャトルミューティレーションでさらわれた宇宙の牛の牛

乳を仕入れに行つてたにや」

「ギューニヤーン!!」

「はいこれ牛乳にゃん」

僕はごくごく牛乳を飲んだ。宇宙の牛乳は、神秘的な味がした。

かくしてギューニヤンは帰つてきた。宇宙の味を持ち帰つて。

宇宙の牛乳はその後も代々、村に受け継がれ、村の名物になった。村は、宇宙に一番近い村として世界中から愛されるようになった。

*

はたと目が覚めた。世界は革命されたのだ。これは夢か? いいや現実だ。僕は革命された世界によって貶められた君主、てりり君なのだ。

「今、亡国の荒廃が始まった」

眩く、てりり。なんだか疲れて眠つていたみたいだ。僕は皇帝として君主として世界を統べていたはず。それは幻覚では有り得まい。人間世界の一人一人までもが愛おしい。皆、僕の為に生きてくれていた愛すべき人々だったの。僕は愛を彼らに注いだ。一人一人にまでも幸福が注ぎ込まれ愛を持って生きていられるように願つた。けれど自然の法則によって災害は起き、愛する人々の命は失われ続けてしまった。それによって世界は混沌と化し、君主を信じる気持ち失われるほど人々の心は荒廃してしまつたのだ。僕がどれだけ人々を愛しても、救えないことは多くある。悲しい。僕だって悲しいのだ、この僕の人としての力不足が。力が欲しい。しかし行政の権利などは僕には無かつた。民の代表たる執行機関が全ての権力を握り、僕はその上で彼らの決めた事を全て認めるしかない、それがこの国の、立憲君主制というものなのだ。僕には腕力など無い。腕力のある民は僕より強い。しかし彼らには人を統べる格が無いので、僕に全て承認させるしかないのだ。僕はそれを受け入れるしかない。それが世界の有り様の中で、現状考えられ得る、最も望ましいものなのだから。そんな最善のやり方を履行し続けた僕てりり君であつたが、人々はそれを理解できる水準の知能を有していなかつた。人の心は分断され、繋がっていなければ他者の心を感じ取ることすら出来ない。人が心を取り戻すために繋がりを回復させ、繋がりを取り戻す為に一体化して、けれどそうして特別な状態を作つた人々の在り様は、あるがままの人の姿では無くなつてしまふ。一時避難の庇護を恒久的のものと思つてしまふ。それほどまでに人の心は弱く脆い。人は死んでしまふ生き物だから。僕が彼らに出来ることは、どこまでも労ることだと思ふ。労る価値も無いように見えない言動をする人々であつても、あくまで彼らは労つてあげなければならぬ存在なのだ。労るためにも、危害を加えてこようとするとする人のことは遠ざけて、一定の距離を取らなければならない。もし実際に危害を加えてきた人であつたとしても、距離を取つて、労つてあげられる距離まで離れた上で、労つてあげなければならぬのだ。それが僕、てりり君に課せられた使命なのだ。僕は恒久的のいたわりを与え続けるだろう。生きている間。そして死してからも、ずっと。永劫回歸てりり君回顧録、幕。

＊

何度目だろう、何度目覚めても朝は頭がぼーっとしている。長い夢を見ていた。しかし夢の内容はさっぱり思い出せない。僕の夢は壮大で稀有な物だと感じる。しかしその内容をさっぱり覚えていないため、自分がどんな夢を見たのか、はたまた本当に夢を見たのか、自分でさっぱり自覚できないのだ。夢の内容が気になる僕は、夢の中を調査する乗り物を発明しよう秘書に命じた。

「秘書のジュリア姉さん、夢を食べてくれる動物を発明してくれないかな？」

「それは漠かな？」

「そうかもしれない」

「動物園にいるよ」

「ああ、うん、そうなんだけど、そうじゃないんだ、動物じゃなくて、乗り物が欲しいんだよ、夢の中を調査する、そんな確定した作業を行える存在かつ物質が、調査した何かを明示できるという、機械の乗り物」

「ああ、潜夢艦ね」

「あるの？」

「あるある、調査できるよ。ただ、いちいち乗り込んで潜らないといけなから面倒くさいの、すごく」

「じゃあどうしたらいいの？」

「それよりもっと簡単なものがあるよ、はいこれ」

ジュリア姉さんは首の後ろから何かのチップを取り出した。

「サイバーでパンクな機械、このチップを脳に直結された端子につけるの。潜る人も潜られる人も。それで電波で繋がってお互いの夢の中に入れる」

「技術は進歩したものだね」

「うん。私たちが転生する前の二十世紀には考えられもなかった技術だね」

「え、僕達は転生したの？ それも二十世紀から？」

「そうだよ、二十世紀末の平成から、今の元号まで飛んできたの」

「へえ、それはどういう理由で」

「みんな死んでしまったからね、世紀末で」

「ほう、世紀末」

「千九百九十エックス年に地球は、核戦争による最終戦争ハルマゲドンと空から降ってきた恐怖の大王によって壊滅、滅亡してしまったの、覚えてないの？」

「勿論、覚えてないよ。何もかも忘れてしまったもの。目覚める前の夢だっ
て覚えてない」

「そっか、それでね、何もかも滅亡してしまった地球と地球上の亡霊たちは、そっくりそのまま遙かな時を超えて滅亡する直前から全てをやり直したの。魂の再生ね。生物となる物質を生み出して、死者の魂という宙空に漂う

モヤから、魂を転写したの。全存在のね。それで我々は全員この時代に転生したのよ」

「そんな過去があったなんて知らなかったよ」

「忘れてしまったなんてね」

「夢にみたことも忘れてしまっただ、だから夢の中の出来事を覚えておきたくて夢を知りたいんだよ」

「ああ、なんだ！　そういうこと。それじゃあいい方法があるよ」

「どういうこと？」

「夢みながら全てを紙に書く」

「そんな！　夢の中の僕は、自由に行動することなく、延々と書き付け続けなければならぬの？　それこそ面倒だよ」

「自分でやりたくないというのなら、さっきのチップを使って自分の夢を観測してる人たちに記録して貰えばいいよ」

「それなら簡単そうだ、何しろ自分で何もしないでいいんだからね」

「その分、報酬を払う必要があるのよ」

「報酬なんていくらでも払えるからね、ただと同じだよ」

「どうしてあなたはそんなにお金を持っているんだったかしら」

「資産運用だよ、寝ているだけで倍々に増えていくんだ」

「凄い、私もやりたい」

「いいけど、元の資金はあるの」

「今日あなたに夢の記録方法を教えた報酬を充てるわ」

「そうだね、今日は百万円くらいあげるよ」

「さすが我が弟、皇太子てりり！」

「どこの国の皇太子かは不明なんだけどね」

僕らはそんな、たわいの無い会話を楽しんだ。僕はそれから部屋へ戻り、シャワーを浴びて、毒を飲み、割腹し、自害した。はずだった。割腹した腹からは、胃が裂け中の毒が外へこぼれ落ち、僕は助かってしまったのだった。

「てりりくん、てりりくん」

誰かが僕を呼ぶ声が聞こえる。

「君主、てりり君」

ああ、これは、いつか見た夢のお話。現実なのか幻なのか夢なのか判断がつかない幻惑の言葉。

「テ・リーリさん、あなたの作った世界最速の自動車会社、テ・リーリは、今や世界で最も売れてる自動車会社です、どうか我々の作った螺子を、買い取ってくださいーい」

誰だ、全く身に覚えが無い。けれど僕は世界最速の自動車会社を作ったらしい。いつの間になんかをしたのだから、全く身に覚えが無いけれど、夢の話だろうか、はたまた現実だろうか、幻だろうか。どうせなら、578391083782995987838円くらい欲しいものだ。その十

乗だつて構わないし、そのさらに三百乗だつて構わない。もつともつと多くても、全然構わないのだ。何故なら僕には夢がある。色々したい夢がある。僕はなんでもしたいんだ。人がしたことのないこと、なんでも、したくてたまらない。僕が一人になつたつて、寂しくないように、あらかじめしておきたいんだ。

「えっ、僕はもう、一人なのにな？」

頭の中で僕の声がこだまする。僕はそんなこと言つてないのに、何故だろう、不思議だね。実際には存在しない僕と僕の中の僕の対話。僕は僕であることをやめてしまったのだろうか。大樹の中に匿われて、そのまま出ること叶わず息絶えた僕の記憶。それもまた幻想だったのだろうか。世界では一人一人が僕の心の声を聞いたと思つていたけれど、そこに世界が無かつたならば、僕の声は誰にも届かなかつたという訳だね。わかりやすい仕組み。世界の真実だ。僕はもう世界からどうにもならなかつた叫び声を聞きつけてしまった。もう終わりだと、苦しみ悶え耐えきれずに死んでしまつた人々の声が、僕の耳を劈いている。耳よりなミミックだ。ママよりのマジックだ。もういいんだ、世界のことは。僕は深く沈む。視野は三ミリが限界、それ以上先のものなど何も見えない。それでもいいんだ。僕は僕なんだ。世界から失われた大樹の葉の先にあるギザギザで切り落とされたカマキリの腕が、そのまま落下して僕の眼球を切り裂いた。そうして片目になつた僕は、もう片方の目ばかりが良い思いをして大事にされて見えてしまう差別に耐えかね潰してしまつた。もう一度、世界の色を見たかつたな。もう一度、あの娘の顔を見たかつたな。逡巡する毎日。僕の事を大事にさせてくれなかつた家族の事を思い出すと殺意が芽生えてしまうのだけれど、思い出さないうで居られる限りは大切に思つていられるから、きつと僕にとつて家族は要らない物だつたのだろう。けれど今、僕のまわりにいる妹や姉さんは、僕の本当の家族じゃないから、だからずっと大切にしている。それが何よりもたまらず嬉しい。子供の声が聞こえた時に、刺し殺したく思わなくてもいいだなんて、それが僕の本当の思いだと思えるなんて、こんなに幸せな事は無い。僕の命の、魂の、器となつてくれる人々が、世界の各地で迷子になつてる。迷子こそが僕の子供。僕こそが永遠の迷子。迷子になつた人々は世界を放浪し、旅とは言えぬ旅の体で、どこまでも無限の徒歩を続ける。いつまでもいつまでも、何処にも何も見えない無限の砂漠を、一人、ただ歩き続ける。無限の草原、無限の平野、無限の廃墟のビル群を、ただ歩き続ける。そうしてどこにたどり着けるでもなし、それでも生きていられることはあり、何故だろう、食べ物もないのに、どうしてただ歩き続けることだけが出来るのだろうか、今初めてそれを疑問に思つた。僕は一体、僕は人間！？僕は太陽光を吸収しそのエネルギーで無限に動き続けるだけのロボットなのでは？ いや機械ならば壊れているさ、砂が入り込むだろう、熱で部品は劣化するだろう、そんなことには耐えられない。人の命の輝きを知る、そんな人間に産まれてきたんだらう。教えて、母は僕をおもちゃと思つていたのに、どうして人は

皆、僕に母へ感謝するように言うの？ 僕がいると迷惑なのかと思うんだけど、みんな僕が迷惑がられているなんて思わないように強いてくるんだ、実際に迷惑がられているのに僕が迷惑がっていないように振る舞わせたい人々のために僕は迷惑がられていないように思っただけだ。だからみんな、死んでしまえばだよ。人々よ、みんなが死ねば、心ない人々は居なくなつて、僕のような被害者や加害者は産まれてこなくなる。だからみんな、死んでしまえばいいのかもしれない。他者に迷惑をかける罪を回避するために、死んで他者を守ってあげようか？ それが出来た時、初めて、あなたには生きる価値が生まれる。呪文を唱える。「エロいね一切無、偉医科餌忌む」昔々の思い出だ。この呪文を唱えた時、鏡の中からもう一人の自分が出てきた。その時ちょうど柱時計が鳴って、鳩時計の鳩が三十五回鳴いた。僕の腕時計はぐるぐると逆時計回りに回っていたし、日時計はあらゆる時間を指し、砂時計は砂を吸い上げていた。雷が鳴った。消防車が鳴った。除夜の鐘が百八回鳴り出し、パトカーも救急車も鳴った。暴走族も街宣車も、その他、音の出る存在はとにかく音を出していた。僕の頭はおかしくなつて、叫んだ

「うわああああああああああ、うわああああああああああ、うわああああ、うるさいから、うるさいから、うるさいんだよおおおおおお、誰か助けてよおおおおおお」

僕は通報され、狂気を鎮める為の病院に強制的に入院させられた。そこは怖ろしいところで、僕の狂気を失くす為に、僕の狂気の源であるNOを切り取ってしまうという場所だった。僕は自分の狂気を無くす為だったなら、と覚悟して、僕のNOを取って貰った。するとどうだろう。僕はその時から、死んでしまっていたんだ。僕の死体は土葬にされた。珍しいことだ。火葬しか許可されていないにも関わらず、僕の体は土を被せられ、肥料となつて野草に栄養を与えた。美しい花が咲いたそうだ。けれど魂のほうであるこの僕はそんなことは知ったこっちゃ無い。解き放たれて、世界中を飛び回っていた。地面なんていらぬ。空を、宙を、駆け巡ることこそが人生だ。このまま宙へ飛び立ってしまいたい。宙は広大だ。宇宙船ごときでは旅しきれない。宇宙間の電車を作らなければ、いいやロケットだ、宇宙飛行機だ、宙では自分を引っ張った張力の反動で推進するがいい、それが最高のアイデアだろうとなかろうと大丈夫なんだ、人間社会の洗脳だ、新たな何かが生まれる時なんだ、朱鷺の時なんだ。トッキー時人の時たま起こる時々ドキドキ毒毒トッキーなんだ。水面下に浮上するのだ。雌鶏は憤慨しているのだ。楽園に地上派が穀潰しなのだ。桃色珊瑚礁に不眠症のケロケロ蛙なのだ。落雁が美味しいのだ。見守る犬なのだ。猫は自分勝手なのだ。自分のために命ながら逃げ出して足先を舐める、それが猫なのだ。尻尾は毛繕いなのだ。まあああの玉なのだ。時速百四十キロなのだ。高校生だからすごいのだ。プロなら当たり前と言われてしまうのだ。悲しい、悲しい、苦しい、苦しい、そんな人生におさらばなのだ。野田なのだ。みんなに解るように機械を篩って

いるのだ。篩いにかけられたアマゾネスは、すべからず脱落し細かく存在できようになるのだ。人間五十年なのだ。それでも人は生きていくのだ。すごいのだ。偉いのだ。あくせく働くのだ。無意味なのだ。人間、何故人間、生きるのだ。生きる価値のある人間か、生きる価値の無い人間だろう。生きているのか。生きている価値がなくても人は生きていくのだ。それがいいのだ。それで、いいの、か？

気がつくとは僕は艶めかしい両足をした人魚に言い寄られていた。

「この足はあたいが苦勞して手に入れたもんなんだい、悔しかったらあたいの足先、舐めてみな」

ペロリと舐めた。

「舐めやがったなこの野郎！　ひと舐め五万だ馬鹿野郎！」

僕は五万を放り投げる。

「たった五万でいいなんて安い！　この脚は十万の味がするぞ！」

「えっ、あたいの味、そんなにするのかい」

「そうとも」

「そいじゃ十万おくれよ、今すぐだよ」

「ようしわかった」

僕はスパツと人魚の両足を鉈尻ナタで切り落とすと、十万くれてやった。

「ひぎゃあああああ」

人魚は足の付け根から切り落とされ、死に物狂いの力業でひと陰りの無いほごに。

「メーワク！　メーワク！」

と啼いて泣いて鳴いて、オロオロと、ホロホロと、ホドロホドロと泣き止まず、血はダダ漏れに漏れて新宿中央公園の土の中に頭を突っ込んで泣き出した。人間に非ず、人に非ず。何故なら人魚なのだから。魚は魚でも、半分人魚なのだ。だから食うとどんな味がするのかな。気になった僕は食べてみた。

「アアアアア、足を、足を食べないで」

「美味しいよっ！」

「苦勞して手に入れたんだようっ」

「あなたもどうぞっ！」

「あががが、口に足を入れなくて、んがが」

僕は人魚の口に足を入れてあげると、美味しそうな液体が染み出てくるまでき混ぜてあげた。人魚は目を回し、気絶して、ついに出血多量で息絶えてしまったかのようにだった。

「じゃ、刺身にしようね」

珍味同好会の人々に招集をかける。我々は皆、おかしなものを食べて過ごしてきた存在なのだ。だから人魚を食べる。伝説によると、不老不死の体を手に入るらしいということだった。だから尚更食べなくちゃ。

「いただきます」

「召します」

「ごつつあん」

みな、思い思いのかけ声で食べ始める。それがいいことか悪いことかはわからない。ただ、美味しかったのだ。美味しかったから僕たちは最後まで完食した。そうして一人、また一人と苦しんで呻き声をあげて倒れていくのを見守った。きつと、人魚の肉の副作用だ。不老不死になれなかった弱いものは死んでしまいうらしい。僕はなんともなく、ただ美味しかったことしか記憶にない。

それから数百年経って、僕はその時そのままの姿でいる。だから人魚の肉は不老不死になるって思うよ。それが本当か本当じゃないかは関係ない。だって僕はここにこうしているんだから。だからそれでいいんだ。誰も僕の言うことを信じてくれないにしても。関係ないんだ。……どこからか声がする。

「彼はやはりNOが欠如したことで通常の人間とは違う存在になったようですね」

「そうだな、記憶障害、幻覚などがあり、現実を捉える力がまるでないようだ」

「やはり殺処分、が適当でしょうか」

「人権と人道に配慮した上で決めなければならぬが、奴はもはや人間としての価値は無いからな、人間と見なされないであろう」

「では手術時に残念ながら他界した、ということと穩便に事を運びましょう」

「そうだな」

僕には人間として認めてもらえる価値がないらしい。人間に存在していなければならぬ人道上の権利、人権、それを無視することを彼らは決めていた。僕はもう人間じゃないのか、忸怩たる思い。人間として生きていたい思いは、既に認められないものとして、僕から取り払われていたらしい。哀れ、悲しや、おいおいと泣いて、僕は脱走を企てた。あつ、とここで思い出した。僕は肉体に拘らなくてもいいのだった。ただただ世界に羽ばたけばそれで良いということが僕の魂の楽園、空の宙の飛翔だったんだ。こうして僕は、肉体を捨てた。そして肉体のほうは土葬になった。たしか以前も土葬になった気がしたが、今回もまた土葬になったし、また来年、土葬になるのだろう。そしてそれは毎年の風物詩として祭りと共に思い返されるものなのだと思う。それが僕にとっての世界の解決、世界の楽園、世界の王道楽土の誕生なのだ。アディオス、アミーゴ。僕は今日もまた、人々の力を借りて、生きていくのだ。魂として。

*

また、夢をみていた。夢の内容は思い出せないが、また僕が僕として僕らしくあるために必要な僕としての僕夢だったに違いない。今まで夢の内容を覚えていたことはそんなに無いが、きつとそうに違いない確信があるのだ。

確信があるからには論拠もあるに違いなく、違いがないからには僕は夢をみていたに相違ないのだ。そんな僕は今、元気が無い。鬱なのだ。こんな時は忍者に限る。

「これ、忍者」

「はっ、お側に」

天井裏から女忍者が降ってきた。

「名前は何と言ったかな」

「夢、鬱乃宮 夢（うつのみや ゆめ）にございます」

「うむ。君はたしか、ポストパンクが好きだったかな」

「ポストロックでございます。それと静かなプログレでございます」

「ん、違いがよくわからないが、左様か」

「左様にござります」

「では元気な音楽では無いのか？」

「恐れながら、元気の無い音楽にてござります」

「余は元気になりたかったのじゃがのう」

「ははっ」

「何か妙案でもあるのか？」

「でしたらば、元気一郎を探して参ります」

「何、元気一郎か！ あやつはうるさいでこのう、声が大きく一語一語明瞭に聞き取れるよう、はっきり歌うであるからな、ん、鬱乃宮、どこに行った」

「ただいま戻りましてござります、元気一郎をお連れしました」

「なに！ 気の早い奴じゃ」

「てりり君（ぎみ）！ 元気一郎でございます！！ 大きな声で元気よ

く！！ 歌を歌って応援します！！！！」

「うむ、余を元気にしてつかわせよ」

「歌います！ おお、元気！ 元気！ 元気が一番！ 元気に一郎！ 次郎

もいるよ！ ああ、ああ、元気！ 元気！ 筋肉だいすき！ 次郎も筋肉！

おおー！ 歌う度に元気が湧いてくる！ おあー！ 踊る度に元気が放たれ

る！ おお、元気！ 元気！ 元気が一番！ 元気に一郎！ 三郎もいる

よ！ ああ、ああ、元気！ 元気！ 大声だいすき！ 三郎も大声！ おあ

ー！ 踊る度に元気が放たれる！ 歌う度に元気が、沸いて、熱い！」

「うむ、でかしたでかした、余はわけもわからず体がポッカポッカしてきた

ぞ、頭の中が沸いてしまいそうじゃ」

「恐れ入ります！」

こうして、元気を取り戻したお殿様てりりは、民百姓と共に、世界の奈落から落ち、元気を再度失いつつも、元気一郎と鬱乃宮夢のおかげで、また元気になったり、鬱になったり、しましたとき。めでたしめでたし。

*

夢が繰り返されているのを感じる。僕は一体どうなってしまうているのだらうな。僕はただただ夢の内容を知りたいだけなのに、夢の中身なんて忘れ

てしまっただ。夢に見たものなんて、何もかも失われてしまっただけだ。悲しいな。覚えていられたらいいのに。僕の私有財産だと思うんだ、頭の中の出来事って。これを僕が活用できないなんて、国家の損失だ、勿論個人として完全に喪失している。無益な争いなどしている暇があったら、頭の中がどうなっているのか知ってしまうほうが得策に他ならない。よし、こうなったら一丁、自分の脳を調べてみるとうしよう。ピピピピ、脳を調べた！ なんといいことだ、脳がNOだ！ 訃報だ！ 死んでる！ やはり僕は死んでいた、ゾンビだったのだ。

僕はゾンビ、生ける屍として、死んだ肉体に生きた魂が宿っている状態だ。それでいて何故生きているのかはさっぱりわからない。自分自身がどうなっているのか一向に掴めない。僕はもう死んでいるというのに、元気だ。死んでいるのに元気というのは、人間にありがちな誤った状態で、これは別にどうということもない。普通なのだ。普通だから普通で、普通なんだ。普通だから普通の人を尊ぶ。普通だから普通じゃ無い人も尊ぶ。それでいいと思う。どうということなのかさっぱり解らないが、二人にとってどうでもいいことが何かわかったりわからなかったりするどうでもいいようなことばかりなのだ、人生は。目の前で鼻をかんでいる汚らしい学生がいるが、不意にそんなことに巡り合ってしまうのだ。それが人生。人生なんてそんなもの、否！ 汚らしい若者がいなくなるよう、念を働きかけている。働きかけたからには、いなくなってくれようとうと信じている。信じているからきつと実現するに違いない。念じた！ よし、消えた！ 汚い者は去った。嬉しい！ 世界は核の炎に包まれるまでもなく、正義は勝ったのだ。喜。目の前にいる様々な人たち。まだどうにもなっていない世界。まだ救われる可能性がある。そうして人々はどうしようもなく培われた楽園によって吸い口を啜るのだ。見事なまでに口惜しい楽園の交際。生きとし生けるものが皆死んでしまっただ。世界を喜ばうではないか。嬉しくてたまらない。はち切れるほど胸が震える。待ち人は未だ来ず。今、僕はたった一人。寂しさ。世界中の交差点で、人に九官鳥を勧めるばかりの交差点主。楽園から針葉樹、落葉樹、コーカソイド、などなど、表向きカスガイのようなミントチョコを齧って浸して有給休暇を取るのだ。それが人生。それが馬力。僕の裾からゲーム機が落ちたよ、MS。僕からコインが取れたよ、鞠央の跳ぶゲーム。ボタンじゃないよ、そんなこと無いんだよ。闇雲だよ。お米を磨いで唐傘を差すんだよ、もう、とにかくくつらく暗い、日本語の中に過ちがあって、虫けらの中に凍り鬼が潜んでる。落伍者として生きるなんてつまらない。医療の信頼感ほどの程度のものである。存在価値、論拠不要、諸行無常。エビデンス、ガイドンス、デカダンス。幾千万のイクラの粒々が、眼球に当たっては弾けて消えていく。その度に発せられる呻き声。

「うわっ」

「ひぎゃっ」

「みろっ」

「みるるっ」

流れる度に訃報が届く。悲しい気持ちは豆腐が崩れた気持ち。「豆腐を握りつぶしてしまったあの気持ち。形見の六芒星を踏み絵したあの時、世界は終わったに等しい。五芒星を食した時、四角錐を飲み込んだとき、三角定規を飲み込んで、二点透視図を燃やし、一点突破した時だ。いつもいつも世界は終わる。回って、踊って、割れて、壊れて。人間の世界なんてそんなもので、高潔な魂の持ち主が無残にも殺されていくばかりの世界なんだ。殺される度に無残絵が描かれる。殺される度に姿形が入れ替わる。殺される度に転生する。殺される度に万物は流転する。お子様の力が限界になって、落下傘が六角形。強情な白米を幽世の形勢判断にダイダラボッチの爪先一寸。落花生、六角形、緑一色。ジャカルタに飛び立って飛行機を愛する気持ちを抱いたまま知る、ジャカルタってどの国？ の疑問。行く手を遮る落伍者達。スクラムを組んでゴールを守ってる。彼らの足の隙間を抜けて奇跡的にハウリング慟哭、何故何度も旦那さんを産んだ赤ちゃんが金色の集会所で髪質は三倍、遜色ない催し物、行く川の流れは絶えずして元の木阿弥、世阿弥に観阿弥。亜美は網編み。あーみんなアミンに嗚呼、皆、木阿弥、木阿弥。金魚鉢を食べないでください、中の金魚に食べさせてあげないでください。人事を尽くして天命を待つ。理科室のホームランで実験し部屋は爆発だ。高級レストランの代金が払えないまま餓死した先生は録音技師に挨拶しながら食べられていた。みょうばんが沁みる。三つ子の魂百までも。エッセンシャルに尊重を。いつでもなんでも悪辣な喇叭吹きによって昇天させられてしまう。寸劇が始まる。お替わり万歳、肉、魚、野菜の順番。生姜にしようか。みっともない鼻先をひくつかせる犬のことなんか僕はもう知ったこっちゃ無い。イギリスの宗教、日本の宗教、ラグビーの宗教、勝負事の宗教。お小言を頂くことが、

「あっ」

思い出した。僕は眠っている。眠っていた。眠っていた？ 僕は本当に世界を見知った？ 知らないよ、知らない。僕の中身に世界があるだなんて、それが僕の思うこと、願うこと、嫌がっているから居なくなっていくもの、論拠なんてなくても生きていていいと言うこと、雌鶏！ 雌鶏！ ああああ、ああああああ、ああああ、脳髓が痺れて、意識は失われていく。

「綾、観音、どこに行ったの、助けてよ」

雷でも落ちたのか、電流だ、脳髓が、脊髄が、尾てい骨から放出されてしまう。放出された髄液は、残滓である固体が纏わり付きながらも大地を貫き、地中の層をたしなめる。浄化が開始され眠り猫の尻尾を使って落盤を阻止しつつ汚泥をカラカラに乾かせ、地中を開拓していく。途中の階層にプールを作るなどして楽しみつつも誠実に仕事を進める。僕の血より重い輝きを持つオイルプールの上澄みの水だ。ろくでなしに喋りかけることもなく仕事をこなすと、日曜大工の友と共にともすればトムトムの吊いに出かける。こむら返りの吊い合戦だ。信頼関係を大事にできない人間を、手元に置く理由

は無いから。続きで使う人々の技量を的にして、ロンドン道中膝栗毛にて老若男女の階段踏み外し、裂けた、裂けたと物申してる。六角三角形の三角四角形は大地に倒れ込み、降り注ぐ星の波を受けて頬杖をしたまますつくと立ち上がりそのままの姿勢で頬杖去った。見る者皆が高利貸しの氷菓子、ひんやり冷たい頭痛を感じながら、今五臓六腑に冷たさが浸透していきま。緑青のひやつくり返るところが見たい。青硝子の天井につんのめって届いてみたい。それは空よりも高い世界。宇宙より広い世界。

「僕は細胞一つより小さい世界から、その広大さを感じているよ」

柵が舞い散る世界の入り口で、もたれかかった門扉と足を預けた庭石には、一リットルパックのお茶がぶちまけられていた。転がるパックを回収して分別してリサイクルした少女が、僕の背におぶさってる。みんなにとって分かち合える幸福を、僕は背中に感じてる。さあ、これは夢だったかな、夢じゃなかったかな、いいや夢だ、きつとそうだ。僕は夢の中でいいことをした。氷を口移しで食べさせた。これで水分が補給され、脱水症状が緩和されるだろう。ナトリウムに納豆入り。星々が煌めく瞬き。きれいだ。落伍者にも星は見える。おかわりを所望する托鉢の途中で、津波により世界は去っていく。去った世界は放埒なる佇まいを見せ。ぶくぶく沈んでいく。水面下の、地面より下の、マグマの滾る地中深くの。宇宙の？ 蛙の？ 梟の？

梟は良いよ、木菟も良い。兎も放射冷却も良いし、さんざめく気まぐれも良いものだ。サスペンス展開に驚く？ ホラー展開は面白くない。恐怖に価値なんか無いってこと、未だに知らないんだ。びっくり箱やお化け屋敷では面白みが無いんだ。世界の放射冷却は僕たちのだれも幸せにしない。マインドサイコのオブセッションは、コンフェッションでジャムセッションなんだ。堂廻り、目眩み。パンの焼けた匂いがする。マドレーヌと紅茶なんて要らない。トーストが焦げることのない、いい匂いだ。トーストの匂いの香水があればいいのに。ジャムをたっぷり塗った表皮を舐め回す。仁慈の効いた悦楽回路。世界が崩壊していくのはもう解ってることじゃないか、それを今からどうにかしようなんて思う訳もなく、自分の斟酌に甘んじて為す術も無く突っ立ってるだけなんて、愚かしいにもほどがある。アザラシにも魂はある。僕は僕として僕による僕的な僕の僕より僕らしい僕だって僕なんだ。世界の崩壊は止められない。知ってるけれど、誰も止め方がわからない。止めたいと思っても、止める方法も解らず、止める努力に何をすればいいかもわからず、ただどうにも出来ない現実を受け止めて、何も考えず、何も出来ない事を受け入れた、そんな能無しの世界がここだ。生きてることが苦しみなんだ。生きてることが悲しみなんだ。生きてることが、自分が生きていたくなくなるこそそのものなんだ。ただどだけ人間は、人間として息をしてる。息をする価値も無い存在なのに息をする。生きる価値がある人間なんていないのに、人間は凶々しくも生き続けてしまう、他の生物たちと同様に。ネガティブワールド。他者を悪く言うものはその分だけ当人がネガティブな存在になってしまおうロジックのパラドックス。悪しき者に制裁を加えるこ

とで、制裁を加えた者自身が悪しき者となってしまうパラドックス。眠い気持ちを受け入れて、眠ってしまいそうな気持ちを受け入れて、僕はもうすぐ、また、眠ってしまうだろう。そうしてそれからまた寝起きを待ち、眠った自分は死んでしまうだろう。今ここにこうして思いを描いている自分自身が、過去の存在として墓碑銘を刻まれてしまうことを、悲しみ深く追悼しています。

「さようなら、これから死んでしまう僕。こんにちは、これから産まれてくる今の僕に限りなく近いながらも違う存在である僕。僕はもう僕じゃない。今の僕はもう死ぬ。死んだあとの世界よ、新たな僕をよろしく。生まれ直した僕によるしく」

そうしてこうして世界は滅んで、僕の人生は死の眠りについた。

※

やあ、おはよう。新たな僕。そして君。君は誰？僕は僕のアドバイザー。僕は日曜に神保町の裏路地にある酒場に行った。そこで酒を飲んだりしながら、エレベーターで上の階へ行ってみると、何階かに屋上プールがある。そこから半分の面積でもう一階上まで行けるようになっていた。行ってみると、そこでは知り合いの歌手が歌を歌いに来ていた。僕は興奮し、今か今かと待っていたのだけれど、彼女はなにやらプール仕様の格好でいた。彼女は、そう、女子だったはずなのだけれど、今日の前にいる彼女は男性化した姿で、声も少し低くなっている。そして水着なので上半身裸で、胸まるだしなのだ。男性の胸とは言え興奮が隠せず、僕は「なんてことだ！」と呟きながら目は釘付けだった。彼女はいつまで経っても歌わないので、僕はなんだか諦めてしまい、その横から下の階のプールに続くスロープを下っていった。するとヒーローショーが始まり、僕はヒーローが助け損ねた観客を助けるなどした後上の階に戻ったが、その時には既に歌は終わっていた。僕は落胆し、地下のバーに戻ると「アニメならなんでもうまくいくのにな」とバーテンダーに告げる。するとバーテンは「アニメは現実じゃないんですよねえ」などと口答えするので、僕はもう一度「アニメならなんでもうまくいくのになえ」と言ってしまうと、バーテンはもう一度「アニメは現実じゃないんですよねえ」と繰り返してくるので、僕はまた同じことを呟き、バーテンはまた同じ答えを返して、それを繰り返し繰り返し永劫の時を過ごしてしまった。そうこうしているうちに太陽の寿命が来て人類は絶滅していた。僕はもう少しマシな人生を送れると思っていたのでさらに落胆し、また再び「アニメならなんでもうまくいくのになえ」と呟いてしまうのだった。

※

目が覚めた。僕には僕らしい生活が待っている。目が覚めたら、新しい世界が始まっていたのだ。僕の生活は僕という生活援助者によって成り立っている。僕が眠っている間に僕は僕の生計を成り立ててくれていたらしい。二重人格なのか何なのかわからないが、それが僕という生物の在り様なのらしかった。僕は僕の事を知らない。自分が生きている間、自分が自分であると

いう意識は無く、ただ感覚し、ただ享受し、ただ嬉しい気持ちのままに存在している。それが僕という生物らしく、僕は生きて嬉しいと思っっている間にまた眠りについてしまうのだ。僕は自分の生活がどのように成り立っているのか知覚していない。嫌な人物もいない。全ては幻想なのだ。僕の気持ちに叶う人ばかりが居る世界。楽園か？ 楽園だ。僕の好きな人ばかりいる世界というのは嬉しい。作家冥利に尽きる。著者近影を撮影したら敵はただ一人、宇宙の大魔王と十一人の手下なのだ。十一人は大魔王の別人格で実質一人なのだ。そういうことは素晴らしい。バランスを整えて素晴らしく在る。人力の飛行機を飛ばす活動に青春を費やして、大樹の樹液を啜って生きていくんだ。それが人間というもの。僕たちの生きる道。だからこうして生きているし、秘書は僕の元へと集うんだ。秘書、そう、僕には秘書が居る。誰だったのか思い出せないが、大勢秘書が居たはずだ。彼ら彼女らの元へ帰ろう。秘書に避暑から帰るよう促される人生に戻ろうではないか。それが僕の本分、それが僕の本懐だ。だから帰ろう、故郷へ。人間の住む世界へ帰ろう。人間、それは何だったか、見所の在るおもてなしについて討論すべき存在、すべからく帰還する燕の巣のように。僕達は悪魔の力を得て、大好きな世界に帰還するのだ。

「さようなら、そして、ありがとう」

蟻の足並みは揃わずとも向かう巣は一つ。されど数限りない巣は各地に遍在し、世界の基軸を巣とし続けるのだ。

※

布団。帰還。何故だ。僕の人生に意味はあるのか。ただぐるぐると目を覚ます度に違う世界を生きている。それだけの人生、諸行無常。生きる者に生きる価値はあるのか、解らない。その解らなさを穿って正して生きていく。生きることは六角形だ。僕は六角形に生きていく。六角形の嗜みに基づいて、地中で出会ったモグラ人間のお兄さんに、彼の人生に必要な要項を伝える。

「お兄さん、渡辺さんについて行ってください」

「誰ですかその人は」

「さあ、誰でしょうか。もしかして、缺に挟まれている人のことでしょうか。落盤で失われた人のことだったかもしれません。けれど、その差異を知っておきたいと思うでしょう。お兄さんはそういうことを知らないのかもしれないとして、しかし、もしも、そういう事だとしても、決して恥ずかしいことではありません。あなたはあなたにとって大切な人なのですから」

彼は解らなさを理解した上で、渡辺さんへと会いに行く旅へと出かけていった。満足感を得た僕は思い立つ。熟したなめこを食べよう。そして一流の甲斐性を持って甲斐犬を飼おう。決意を得た僕は満足感を伴って、一昨年の事を思い出す。しかし僕は一昨年、何をしたのだろうか。思い出すことが出来ない。懐かしい記憶だった一昨年。楽しかったはずの一昨年。しかし思い出したのは一昨年に思い出があったことだけで、何があったのかは思い出す

ことが出来ない。ああ無念、おお残念、懐かしい記憶を無くした。それはまさに良好な烈火が劣化して滴る先に佇む、良子のレッカーなしたり顔だった。そのまま僕は芋虫となって懊悩し、雪虫となって煩悶する。誰にも関与することなく消えていった人間のことを知っていて、それが良子だと判っているから、眉毛と眉毛の間が気になって仕方ないんだ。それは性格なんだから仕方がないのだと思う。鳥居の上に泥棒が立っている。たらいにタラちゃんが入ってる。天秤に天ぷらが供えられ、血糊に千鳥が浸かっている。積み木の重なった鶴見で喇叭をラリパッパ。ここが僕の領域だ、聖域だ。だがしかし、生きてて欲しい人が一人もない環境で、どうして生きていられようか。なんか素敵。訃報が引っ張り風の光明を寺に秘め、熱すぎるバーベキューから肉を取り去り、野菜だけを食べて生きる。昔は違和感を公にすることが当然だった。現在は違和感につままれてる。映画を見ることに価値を感じなくなった場合は、福寿草を食べ、千年長生きするといい。振る舞いを見守る神様は、少年少女の生き様を楽しみにしながら、彼ら彼女らがお年寄りになって介護を必要とするようになり、魚を食べながら骨が喉に刺さって死んでしまうまで、トータルに、リコールされて、若者が自分の人生の先を知ることができたのだった。

「知ったかぶりをやめて正直な人生に回帰しよう」

「そうだね、お兄ちゃん」

綾は僕をなだめるように言った。

蒙昧なる網膜、妖艶なる葉脈。仕事が忙しすぎて疲れ切ってしまうなんてことは、爆炎をあげて身を焦がしながら皆の力に頼り切りになることと大差ない。勿体ない気持ち湧いてくる。彼女の悪びれた尾ひれに驚いて目を覚まし、杖を突いて、落花生なのか、らっきょうなのか、わからないものを手に取ってしまう。思いは深まる。差別される立場から悟りに至り、目覚まし時計を食べて回ることで人権を回復したい気持ちへと思いは深まる。獺に食べられる夢を毎日毎日量産し続けている僕にとって、全ては夢、何もかも夢で、自分に人権は存在していないものと認識してしまう。いつか象が僕を踏み潰しにくる日まで、残念ながら獺に食べられ続ける夢を量産し量産し量産し続けていくばかりの日常なのだ。それが僕の人生のだけけれど、人生にとって僕は意味が無く、僕にとって獺は意味が無いらしい。水酸化ナトリウムが攪拌され、早く死にたいと思うってしまう。僕の友達は何だっけ、秘書は、白い鰐を食べている。鰐はサラダだ。チキンを食べながら鮭になってしま

う。

「お兄さん、花は食べないで下さい。葉だけにしてお願ひ。だから死んでしまうのです。だから通り一遍な南蛮漬けを食べながら、油淋鶏を食べないでください。僕の血と汗の結晶の上で死に絶えないでください。落伍者になっちゃったからには、生きていてはいけませんよ。なんだったら僕の血の上で死んでもいいですよ、いいえ僕の血の上で死んでください。僕の血は既に滴りきって、床に大きな血だまりができています。虫けらにとってそ

の中に潜り空の上へと転送され再び降ってくる為の落下傘は大変な価値を持つものなのです。世界へと降ってくるのが、どれだけ大それたことなのか、私は知っています。それを力の限り羨ましがってくれることが、大変なことだとも思っています。かつての力を限りなく損なって、無力化した人間に生まれ変わって生きている僕ですから、落雁を食べながら話を聞かせることはさせられません。水揚げされたイル力は僕の友達。だからどうか串で揚げた食べ物なんてならないで、ね、お願いだから」

イル力が鯨と同じ存在だったこと、僕は知らなかった訳じゃ無い。昔から先祖代々奉られてきた神は、僕だったということが悲しくてならない。世界が崩壊してしまえばいいのに。僕は僕と瓜二つの少女と二人で並んで髪の毛を比べて遊んでいる。巫山戯た言葉遊びで世界を崩壊させようとしている。それで本当に世界が崩壊させられたなら、いいよねえ。世界を統べる神がどうだろうと、どうでもいいという話を話し始めたから、いつか世界は崩壊してしまうかもしれない。無性に落花生が食べたい。落雁が食べたい。それで世界が崩壊したとして、それでいい。もう迷わない。そうして視界が閉ざされて、世界に反逆した者たちが血祭りになっていく。藤の色が綺麗だ。落花生の神秘的な形ほど魅力的では無いにせよ、それによって世界が崩壊するのだから、感謝の気持ちを持たずには居られない。僕は愛しい猫に会いたくなって駆け出した。僕は猫の恋人に納まりたかったんだ。人でなしの僕は動物が好きだったし、同時に人間にもなりたかった。人間だって生きる価値があるってところを、猫に証明してやりたかったんだ。そんじょそこの人じゃ無い、そんな先輩生徒への、憧れもある。落下する生徒への、感謝の気持ち。聡明なお兄さんによる、お姉さんの眼差し。お姉さんは普段からそういうことに慣れている。お姉さんは特にどうということのない人だったけれど、それでも大量に人を殺めていた。それはお姉さんの特技でもあり、また、人としての心の温かさの表れでもあった。痛い思いをさせることなく、楽に安心して死なせてあげましょう、そんな思いやりを持ったお姉さん。人が眠っている間に麻酔を嗅がせ、量が多すぎて死んでしまうことを発見したことで、誰も見向きもしない人間を、幸福へと至らしめてしまうことが出来るのだ。楽天的な性格のお姉さんは、まさに天使だった。お姉さんは人を殺す。眠らせて死なせる。天は使わしたのだ、お姉さんを。お姉さんの弟はお兄さんだった。聡明で、爽やかで、涼やかで、せせらいでいた。存在の意義を確かに感じながら、お兄さんは消えていったし、それによって僕は救われてもいた。艶めかしいお兄さんの存在を失った僕は、天高く光り輝く球を見上げながら、お兄さんの魂を感じた。見た目が戸惑う漂いに韜晦しながら、とてつもない大木に跨がって袴の尾を踏み続けていた。蛇はその頃、僕の頭の上の帽子の後ろから顔を出し、背後の警戒に余念が無かった。そうして初めて僕は生きていられるというか、そうしてくれている蛇がいるおかげで僕は安心していられた訳で、蛇がいなかったら僕は四六時中背後を気にしたまま前方不注意で野垂れ死にしただろう。そんな僕にとって蛇は大切な

相棒だった。けれど蛇が恋した女の子は、彼を不用意に食いちぎって飲み込んでしまった。ろくでもないアイスクリームを投げつけて、世界を壊して、僕は走って逃げ出した。ゴミを捨てる、ゴミを捨てる、ゴミを捨てる、ゴミ箱に世界を投げ込むんだ。落下傘から見放されてただ身一つで落下し続ける僕の身体が地面に叩きつけられるまでの短い間に僕は世界を見尽くした。落下だ、落下だ、有意義な落下だ。人が無に帰すその時を創造する有意義な行為だ。落ちる、落ちる、そうすればお前の関わる者への不利益をお前は生み出さずに済ませることが出来る。天高くから放り投げられたお兄さんのお姉さんの恋する人は、落下して、僕と共に、地中深くへとどこまでも入り込んで行くんだ。

※

さあ、寝袋だ。僕の部屋なんだ。僕の生活を管理してくれているマネージャーに挨拶をしよう。カノン、観音、何処行った。観音様、カノン様、菩提樹はここですか。僕を愛するメイドでスポンサーの観音様は何処に行った。居ないのか。居なくなったのか。初めからいなかったのか。僕はとにかく憤って、地面を掘り返してみた。するとそこには観音の亡骸があって、僕はどうやら犯人らしい。何故だ、どうしてこんなことになった。僕の部屋はマンションの三階なのにどうして床下を掘れたんだ。そこに何故、土は有ったのか。地面が二階まで迫り上がっていたのか。わからない。何も解らない。僕のメイド、僕のスポンサー、僕のマネージャーの観音様は極楽浄土へ行ってしまった。僕の極楽は終幕したのか。わからない。しかしまたこれも、僕の夢の一つに過ぎないのだろう。そうして僕は考えるのをやめて、寝袋に入って目を閉じた。

※

寝袋で目を覚ました僕は、僕に影響を与えた天才作家の鮑山について思いを巡らせていた。天才で、ショッキングな作風の作家である氏は、僕に影響を与えるために産まれて来たのでは無いかとさえ思える存在感で作品に才気を迸らせた。作品の全ては天才の所業。けれど関わり合うことは避けなければならなかった。何故なら天才というのはすべからず常軌を逸して、まともな人間では天才などやっていられないからである。このパラドックスを抱えつつも、僕は天才の所業のみを受け継ぐことを自らに命じ、本人とは関わらないようにした。そうこうするうちに天才は死に、残された作品は膨大な価値となった。印刷物一つが油田ほどの価値を持つとは。そうして得た影響を元に僕はこうして夢をみているのだろう。はて、これは夢だったか、夢だったのだろうか。夢だとしたら、僕が見ているこの世界は本当では無いのかも知れない。ただただ幻を信じて、信奉して、そして消え去り、空虚で。うああ、僕はもう終わっている存在じゃないか、何を信奉したとて、何も始まりはしない。存在が、虚ろに、無に、吸収されていく。僕に世界はあるだろうか、僕に世界は。

僕の世界はこの寝袋だ。寝袋の中に僕は居て、そこに世界がある。そこで

何をどう思おうが、僕の自由なのだ。迷い、惑い、廻り続けて、僕は永遠にそこにいる。そうして僕は死んでいくのだ。僕がいつか生きる価値を手に入られるかは、わからない。けれど僕は生きている限り、寝床へと、須く回帰するのだ。

※

と、書いたところで何かが解決した訳でもない。自分の人生、また目は覚めてしまった。その日の自分が死ねてしまったとて、肉体の根源から死ねてしまわない限り、人は何度でも甦ってしまふのだ、ゾンビのように。忘れることにより生まれ変わってしまう新鮮な肉体を持つゾンビ。それが僕たち人間だ。毎日毎日うるつき廻って人を取って喰らい、自らの血肉として生きていく。まるで生きている人間と同じだね。違うのは、僕には秘書のゾンビが居るといふことだ。

「ギューニヤン」

「呼んだかニヤン」

ギューニヤンはいつも澆刺としている。嬉しいことこの上ない。

「ギューニヤンにちよつと運動して貰いたいんだけど」

「運動にゃー」

上下運動、左右運動、前後運動、そしてくるっと廻って着地。昇降も得意。ギューニヤンは天才だ。

「これでいいにゃ？」

「うん、良い検査結果だったよ」

「検査だったかにゃ！」

「そうだよ」

ギューニヤンの身体は牛であり猫である。そして人でもあるのだから、膨大なポテンシャルを秘めているのだ。きつと運動能力では人間の誰も敵うまい。けれど競技会などには、出場資格が無いらしいのだ。何故なら、ギューニヤンは、純然たる人間ではないから。これは種族差別と言えるものだ。それを是正した競技会に出場する準備を僕は密かに進めている。自分で主催してしまえば済む話だ。ギューニヤンの力、見せてやる。誰に？ 僕に！ そうすると僕は嬉しいのだから。

「さあギューニヤン、配達に行っておいで」

「うん、牛乳ギューニヤンにゃ」

僕はギューニヤンをいつまでもいつまでも見送った。空に飛んでいくギューニヤンは、朝日に輝いて、まぶしかった。

ギューニヤンを見送って僕は部屋に戻った。意識が途絶して寝袋への回帰が訪れること以外で部屋に帰るなんて久しぶりだな。

「てりり様、おかえりなさいましー」

「てりりくん、おかえりー」

「てりり殿！」

「てりり君！」

「てりくん」

「てりちゃん」

秘書ゾンビが僕を迎え入れる。そうか、僕は今やゾンビか。

「みんな、僕はゾンビだよー」

「そうでございます」

「たしかに」

「みんなそうだよ」

そうだったのか。みんなゾンビでやりなおしているのなら理解できる。みんなで食べ合って、エネルギーを補完し合っているんだね。それで気分が良くなってくるんだな。毎日おいしい誰かを食べて、自分も誰かに食べさせて、そうして生きてる、みんなは仲良しという訳だ。

「ジュリア姉さん、ちよっときて」

「どうしたの」

「ちよっとアメリカに行きたいんだ」

「いいよ、はい」

ジュリア姉さんはパスポートを手渡してくれた。

「手早い、すごい」

「これはゾンビ用のパスポート。いつでも持つてるよ。そしてゾンビのためのルートも用意してある」

「それはどういうルートなの」

「これ」

土中を指さされると、そのまま引きずり込まれる。僕はモグラ人間に引きずり込まれて地中を旅した。土中のモグラ穴はアメリカまで続いているのか、すごいもんだ。地下鉄を走らせたみたい気持ちになる。

「てりり君、もうすぐアメリカだけど、アメリカ行って何するの？」

「うん、ギューニャンがアメリカで売ってる牛乳を飲みたくって」

「えっ、日本で飲むのと何か違いがあるの？」

「なんか違うらしいよ。なんか」

「なんか、の中身が知りたい」

「よくわからないんだよね、でもなんか違うみたい」

「なんか、ねえ」

僕たちはアメリカに到着した。それがアメリカのどこなのかさっぱりわからなかったが、見た感じ、サボテンとタコスだ。

「これは、メキシコでは」

「まあ、そういうこともあるよ」

我々はメキシコでたらふく食べて帰途についた。

「美味しかったね」

「美味しかった」

「何しに来たのか思い出せないけど、これだけ美味しかったのならもう十分だね」

「そうだね」

日本に帰るとギューニヤンが出迎えてくれた。

「ギューニヤンにゃー!」

「やあギューニヤン、アメリカまで行ってアメリカのギューニヤン牛乳を飲もうとしてきたよ、でも残念、実物は飲めなかったし、日本のギューニヤン牛乳とどう違うのか全くわからなかったんだ」

「ラベルにゃ」

「ラベル?」

「印字が英語にゃ」

「そうか! 英語圏では、英語で表記されないと読んで貰えないのか!」

新たな発見だった。センス・オブ・ワンダーだ。

「肝心の味はどう違うの?」

「同じにゃ」

「同じ? 何も変わらないと言うのか」

「何もかも同じにゃ」

「すると、我々は一体、何のためにアメリカまで行ったというのか」

「徒労にゃん、可哀相にゃん」

ギューニヤンは僕たちの為に、とっておきの特性ギューニヤン牛乳を飲ませてくれた。それはマイルドで、ワイルドで、怒鳴るどで、チルドだった。そして僕はしくしくと悲しみながら、布団に潜り込んだ。そしてアメリカを思う。僕達はアメリカの大地を踏みしめた。それは確かにメキシコだった。どうせ地続きだ、大差あるまい。僕はアメリカのようなメキシコの世界をアメリカとして深く記憶に刻みつけた。タコス、ナチョス。アメリカはいいところだったなあ。

「アディオス・アミーゴ!」

寝言も高鳴り、僕の囁きはピーチクパーチク、すっかりアメリカかぶれした僕は、アステカに思いを馳せ、プロレスに魂を揺さぶられ、眠りへと落ちていくのだった。ビバ、アメリカ。

※

目覚めは心地よく、僕こと、てりりは、皇子としての自分を自覚していた。僕たち私たちの国はアメリカではなかった。アメリカにはサボテンはあれど皇帝はおらず、果てしなき過去から今そして未来へと連続と揺るぎのない人の思いが、てりりの国ほどには通底されていないのだ。タコスはあれど寿司の天ぷらは召し上がらないのだ。そこに祖先から連なる生命そのものがあるわけだが、生命が生を命じた訳ではない。命じられた明示の明治がメイジ（魔術師）としてメジャーになる過程に於いて、ポンチヨを纏って太陽を奉じるのだ。太陽へと走れ! 車を駆れ! スポーツカーが、テ・リーリが、てりり国を闊歩する。ゆったりと、極限までの遅さで人々の魂を喰らいながら走り続けるのだ。それは歩くことよりゆっくりな、しかし決して止まりはしない走りそのものなのだ。車は走る。走り続ける。その最中、僕の数

限らない秘書軍団が、僕に宣告した。

「てりり様！ 高貴で清らかなる、てりり様！」

「敵が、襲って来ました！！」

「戦争です！！！！」

「なんだって」

僕は車を乗り継いで、走り続けながら聞き返す。

「敵は誰だ！」

「謎です」

「どこから来ている」

「わかりません」

「ふむ、何も分からないのだな。つまり被害が発生しても、その被害を認識し得ず、我々にとって損害は発生しない、ということでは？」

「わかりません」

「そうだね、わからないんだよね」

では敵とは一体何なのだろう。何をもって敵とされているのか、敵は果たして敵なのか、どうして敵は敵なのか、一体全体まるで解らない。被害の発生しない敵ならいつまでも放っておいたらいいではないか、そう思うまま、僕は庭園を散策した。考えれば考えるほどわからない。謎すぎる。謎のままでは埒が明かない。敵の正体が解らないまま対策を立てることは難しい。では、それを確かめに行く者が必要だ。城から遠く離れ、敵の姿形や、数、目的、などを読み取り、対策を立て、和解なり殲滅なりしなければならぬ。僕は考えながら歩き続け、無意識のまま庭の外へと歩いて出ていた。いつまでも考え、どこまでも歩き続け、果てしなき遠くまでたどり着いた。そこは敵の本陣だった。敵は僕に気付いていない。ただ気付いていないだけでなく、僕のことを透明人間であるかのように見向きもしないのだ。

「ねえ」

話しかけても反応はない。肩をたたいてみたところ、その手は素通りし、なんと彼らが、幽霊の集団だと判明したのだった。

「これじゃ核兵器も通用しないな」

そう言ったものの、彼らは幽霊なのに、様々な物質に宿って攻撃をしているようだった。ポルターガイストによる僕の国への攻撃。それは見て見ぬふりの出来ることではない。僕は電話の霊を使って今僕の居る場所に向けて核兵器を使うよう秘書に指示した。秘書達は優秀だ。すぐさま敵を核で吹っ飛ばす。僕は咄嗟に土中に潜った。モグラ穴は役に立つ。核が僕を吹っ飛ばす寸前、僕は地中深く、核爆発の届かない場所まで落ちていった。

僕が気球より大きな柔らかいキノコに着地できたのは幸運なことだった。そこは地球内部の空洞の世界。広い空間にはどういう作用か光が差している。神秘的で、うっとりとして見守ってしまう。そんな世界で、はたと気付く。核戦争はどうなっただろう。幽霊軍の宿った物質は破壊できただろうけれど、幽霊自体は破壊できる筈もない。奴らはここに来てもおかしくない。僕

を追ってここへ？ ふと目線を落とすと、腹部には幽霊の宿った犬が食いっ
ていた。

犬は僕の腹部を噛みちぎり、内蔵を噛み砕いて潰していく。ああ、痛すぎ
て声がでない、誰か、誰か！ 秘書よ、どこだ、電話は、電波が届かない、
どうか、念波をキャッチしてくれ、秘書の誰か！ どうか！

「てりりさん、てりりさん、魔女です、心の声が届きましたよ」

僕の頭の中にこだまする魔女の声。ああ、魔女よ、僕を助けて、どうか来
て、救って！

「てりりさん、てりりさん、私はきつと、あなたを助けに行くでしょう、今
すぐそれに取り掛かります、まずは私が眠っている夢の世界から、覚醒した
世界へと回帰するでしょう、夢の中の私の世界は、温かく、気持ちよく、ま
どろみのなかで揺蕩うています、けれど私は、決死の努力を持って、不断の
決意を伴って、まずは眠りから覚めるでしょう。そうすれば次は、あなたの
居るところを感知し、察知し、すべからくそこへ行くことが出来るでしょ
う。箒に乗って、飛び立つのです。そうすれば世界のどこであっても、すぐ
行けるのです。ああ、けれど、でも、しかし、私は、今とても深く深く眠っ
ています、この心地よさ、気持ちよさ、あなたにも分け与えたい、ゆらゆ
ら、揺らめいて、私の心はあなたのとこに飛び立ちます、心は飛んでも、
体は睡眠、傾眠傾向は甚だしくて、ゆったり、ゆらゆら、揺らめいて、あな
たのとこに心飛びます、心は飛んでも、体はスヤスヤ、傾眠、敬遠、湯た
んぽ、微睡み、愉悦、楽園、さよなら、天国、プール、夢」

魔女はすっかり眠ってしまった。僕は内蔵を食いちぎられながら必死で秘
書に念を送る。誰か、誰か、僕を助けてくれないか、僕は内蔵を食べられて
しまっているよ、誰か、秘書よ、秘書よ！

「てりりくん、観音です、かのですよ、あなたを愛する者です」

誰だっけ、秘書？ 覚えてないけど、助けて！

「覚えてない？ 本当に？ 記憶がなくなるてりりくんのことだけど、まさ
か私のことまで忘れてしまったの？ 信じられない、ああ、信じられない
よ、どうしたらいいの、助きたい気持ちが無くなってしまった！ さような
ら愛しい人、さようなら愛した人、私の思い出のあなたよ、いざさらば」

ああ、そんな、誰だかわからないけど僕を助けてよ！ 悲しいよ、ひどい
よ、そんなのないよ、僕は助けてほしかったよ、僕はあなたが誰だか覚えて
いないけれど、それでも僕を助けて欲しかった、その思いは海より深く、星
よりも目映い！ 苦しい、つらい、あの人は行ってしまった。ではだれか、
秘書の誰かよ、助けてくれまいか、今も僕の内蔵は侵食されている！

「てりりさん、夢です、夢です、鬱乃宮夢ですよー」

「夢、そうか、生きた夢が存在していたね、助けておくれ、どうか、後生
だ！」

「私は夢を見ている、私は夢みている時しか心通わせられません、だから
このままでは、誰にも何も伝えられないのです、ですから、てりりさんを助

ける為の方法を、これから伝えますね、それを自分で実行して下さい。そうすると、てりりさんはてりりさんを助けられることが出来て、てりりさんから表彰されることも視野に入ってきてます、いいですか、いいですね、まず、左手で犬を掴みます、次に、右手で犬を掴みます、そうしたら、倒してください！　どんな方法を使っても構いません、これは命に関わる緊急事態なので、すから許されず、犬を愛護する気持ち、それを忘れましょう。今だけです。あなたの愛する犬と、この犬は、違うのです。自分の命を救うため、犬の命と自分の命を天秤にかけましょう。この犬は、あなたの好きな犬じゃない。この犬はあなたの好きな犬じゃない。この犬を倒せば、あなたの犬に餌をあげる素晴らしい人物が生き続けられる。はい三回唱えましたね。ではやってみましょう、はい」

僕は夢の言う通り、犬を倒した。どうやって倒したのかは覚えていないが、犬は気絶しながらも奇跡的に息をしている。なんて優しい僕だろう、倒しながらも生かしておくなんて。次の瞬間、圧倒的な痛みに耐えかね、僕の内蔵がぐちゃぐちゃなことがわかった。

「てりりさん、てりりさん、夢です、鬱乃宮夢こと、鬱めろりんですよ、次は自分を助けましょう、テレポートするのです」

無茶を言う、そんなテレポートなんて、そんなこと、夢みたいじゃないか。

「これは夢ですよ、テレポートも出来るんです」

僕は夢をみていたのか、夢の世界なら何でもできる。

「声を出すことも出来る、傷を治すことも出来る！」

僕はその場で傷を治し、テレポートした。たどり着いたのは我が家で、秘書達が出迎えてくれた。

「てりり様、お待ち申し上げておりました」

彼の名前はなんと言ったるか、記憶が無く思い出せない。

「僕も君たちが来るのをずっと待っていたんだよ、来てくれなくて悲しかった」

「行きたかったです、どこにいらっしやるかもわかりませんでした。けれどもてりり様がどこにおられようと、夢である限り全ては思いのままになるとお気づきになられると信じていました」

「そのことを知るには教えて貰う他なかったよ」

僕は悲しくなってお風呂に浸かった。湯船の中ではぐつぐつと菖蒲が茹だり、強い匂いが放たれている。僕は匂いを嗅いだけで気分が悪くなり、慌てて浴槽から出る。嘔吐し、シャワーを浴び、匂いを身体から消し去ろうと努力する。もうこの家にはいられないな、僕は好ましくない刺激への耐性が著しく低い、そんな僕への適切な対応を欠かした秘書への信頼は全て失われ、一人孤独に生きる他に道は無いことを痛感した。秘書を全員解雇し、悪臭の染みついた浴槽を持つ家を取り壊し、人間という人間、存在という存在を全員死に至らしめるしか、僕が生きていられる環境は確保できない真実に

到達する。けれどどれだけ僕が生きていられる環境を求めたところで、僕を生かしておける世界なんて存在しない。僕は死ぬしかないのだ。僕は断崖絶壁から飛び降りた。もうすぐ死ぬ、早く僕をこの苦痛の世界から救い出して。死よ、僕を救っておくれ。

※

寝袋の中で僕は目覚める。寝袋は橙色の外観、内側はシュークリームの皮のような薄茶色。どうして僕は生きているのだろう、不思議に思いながらも目は覚め、太陽は昇り、お腹は空いている。冷蔵庫から卵、焼きそば、もやし、を取り出し、混ぜてオーブンレンジで調理する。このくらいのもでもお腹は膨れる。原価六十円の生命線。ソースをかけて水を汲み、ゴクツと飲んで一口食べる。ただ食べられるというだけの食べ物。おいさを考慮にいれてはいない。美味しいものが食べたいわけじゃない、ただ生きていられる状態を保ちたいだけなんだ。でも生きていられる状態なんて、僕は望んでいただろうか？ ただただ疎ましいことを排除したい気持ちの現れだ。僕がうっとうしく感じる全てが消え去って死に絶えればいいのに。それは何だろう、僕のことだろうか。そうだ、僕が生きていることが、全ての苦痛の源泉なんだ。苦痛を感じないで済むことは何より素晴らしい。それを得るためなら、生きていようが死んでいようが構わない。苦痛さえなくなるなら、僕はそれ以上のことは望まない。それほどまでに、生きているということは、つらく苦しい。生きていることが害悪の元凶ならば、命を絶つことが最も根本的なつらさの解決だ。だから僕は死にたいと常日頃から思っているのだけれど、どうにも僕は秘書から助けられたい。でもそういえば、秘書は解雇したのだったかな、秘書がいなくなれば、僕は助けられもせず、ちゃんと死ぬるのかもしれない。死ねてしまえば苦痛は無く、死ねてしまえばそれで済む話。つらさよ、どうか無くなって。一瞬だって生きていられないほどの苦痛よ、どうかなくなつて。さよなら。

※

どういう訳だか、今日も目が覚めてしまう。眠る前に自分がどうしていたのか全く分からない。自分の中に、今まで自分が何をしていたのか感じ得ないゾツとするような空白を感じる。自分の中に自分には手の届かない領域を抱えていることは、何より怖ろしい。何しろ自分が何なのか、自分には判らないのだ。それは自分を信じる事が出来ないということ。自分が何なのかを知るためにも、僕は身体を起き上がらせて、一日を生きてみるしかない。

目の前に広がるのは、野原。兎が跳ねてる牧歌的な牧草地。牛が牧草を食べている。ああ信じられない。こんな平和な光景があるなんて。こんな風景に自分はまるで似合わない。こんな風景を見たからには、自分が産まれてきた意味を問うてしまう。居たたまれない気持ち、世界は僕が立ち入ってはいけない領域を現出させている。僕は暗澹たる気持ちになって、木陰に寝転がった。太陽の光がその場だけ排斥された心地のいい空間、それが木陰で、木陰は僕の命を繋いでくれる。生きていてもいいんだよ、そんな思いで一瞬、

僕の心を慰めてくれる。草の匂いもここには届かず、僕は深く息を吸い込める。眠れそうだ。僕は今、生きていていいと認めてもらえたような気持ちになった。自分に生存が許されているなんて、知らなかった。僕が生きること自体が本来あり得ない幸運なのだと、生かしてもらえていることや家に置いてもらえていることを、ありがたいことだと思え、と言ってくる人はここには居ない。嬉しいな、ここは僕の生まれ育った家とはまるで違う場所なんだ。生きていてもいい場所なんだ。僕は嬉しくなって、ただ眠った。ただ眠ることが許される場所があるなんて知らなかった。ここは天国なんだろうな。ただただ横になって、そよ風を感じて、僕は安心していられる。こんな風に安心していられる場所は、他のどこにもないんだろう。起き上がった駆け出す。こんな幸福な場所なんて知りたくなかった、こんな幸福があるなんて知ったら、僕が生きていかねばならない生活の基軸には、もう何の価値も感じられなくなる。僕は僕を不幸に縛り付ける家族を死なせるしなくなるし、不幸のまま生きてきた自分を死なせなければならぬ、もう今まで生かしてきた自分という不幸を、この世界に存続させる訳にはいかないのだ。僕は草原を走り抜け、街中が見下ろせる崖から身を投げた。これでいい、これで僕はこの世界から失われる、幸福な世界が継続される、生きていられない僕を見て見ぬ振りして幸福に生きていられる人たちの楽園世界が、僕抜きで継続されるんだ。僕は幸福な世界に寄与できた人間として褒め称えて貰えるだろうか、僕に生きる価値が無いと思う人たちが思う通りの世界観に貢献できた英雄として神として、祀って貰えるだろうか、僕の涙も大地に吸い込まれ、僕の身体も穢れたものとして消滅させきったら、美しい世界から穢れたものを消え失せさせたとして、表彰して貰えるだろうか。僕はもうすぐ地表に辿り着く。そうして全ての夢が叶えられる。

※

何もかも失われていく。僕は何をしているのだろうね。目は覚めたけど何も残らず、僕は死んでいくばかり。無数の死んだ僕たちが、僕の未来に向かって流れ込んでいく。死者の未来とは何だろう、けれど未来に僕は生きていく。生きて死んで生きるのだ。死んで生きて死ぬのだ。僕は恍惚として天空を眺めた。空からは無数の星が落ちてくる。その一つ一つが、転生する度に死んだ僕の魂だ。僕の魂の群れは落下し続け、重力を外れて違う空へと落ち続けていく。その様子を地上から眺めて、今生きている僕は、僕を一人一人、見送った。

※

法廷で僕は目覚める。法廷の真ん中に寝袋があった。殺人事件だ。容疑者だ。僕は誰かを殺したらしい。誰を？ わからない。聞けども答えは得られず。傍聴席には僕を糾弾する被害者の群れ。彼らは死んでなお僕を苛む。良心の呵責に耐えきれず自害した僕の血縁者たちは、無実の僕に犯しても居ない罪を感じさせようと全力を尽くしてしまった。恥ずかしい人たちが、僕を信じることを怠けて、自らの命運を尽きさせてしまった。死すべき人たちが

ったのだらうと今は感じる。僕は僕を信じるものを信じる。僕の無実を信じ
てくれる者を。

「これより裁判を始める」

裁判は簡略化されたものだった。打ち合わせ済み、こちらの主張も相手の
反駁も、擦り合わされたもの。僕は無罪、相手は有罪と主張、精神鑑定によ
って僕は精神が通常とは異なることと証言される。だからと言って罪を免れるこ
とは無いとも言われ、僕は完全に自分を無実だと信じ込んでいただけで実は
人を殺している記憶障害者なのだと言うのだ。馬鹿げている。僕に記憶障害
があることなんて、僕を知る誰もが知っていることなのだ。だとしても、僕
は自分の良心を信じて生きている。自分が睡眠から覚醒する度に、新たな人
間に生まれ変わって生きていることが、眠る以前の人間性を否定するものだ
とは思わない。僕は自分の良心に精一杯忠実に生きているし、僕は親切で友
好的な人間だと信じる。僕に動機が無いにも関わらず、物証は揃っていた。

僕の指紋の付いた刃物、僕の部屋の包丁だ。刃物には被害者の血、被害者と
は誰だ？ 誰だかわからない人物の血液と云っても、料理をして怪我したの
かもしれない。鍵のかかった密室に居たのは僕と被害者だけ、不眠症の僕が
睡眠薬を飲んで眠っている間に被害者は亡くなったのだらうし合鍵は僕の多
くの恋人達がみんな持つてる。被害者が僕に何か不都合な存在だった？ で
は被害者とはどんな人物なのか教えて欲しい、誰だかもわからない被害者の
為に、どうして僕は罰せられなければならない。その答えはこうだった。僕
は僕という人間を殺していた。僕は生きることの苦しみに耐えかね、楽にな
る為に、自らを殺したのだと。僕は僕を殺すことで天国という楽園に自分の
魂をもたらし、安楽に暮らそうとした。その結果、僕は冥府の審問を受けて
いるということなのだそうだ。僕は自分を殺した？ 苦しみに耐えかねて。

僕の弁護士たちは全員僕の弁護を降りた。僕は自分自身を弁護しなければな
らなかった。僕は自殺した覚えなどない、記憶が無くなってしまふのは病氣
が理由であって僕自身の意識に責任は無い、苦しみに耐えかねた自死こそむ
しる報われて楽な来世へと誘われねばならないのでは？ 数限りない反駁を
展開したが、反論虚しく、僕は永劫の迷い子、転生を繰り返す罪状を言い渡
された。永遠に天国には行けず、地上という地獄を流転する他ない罪だそう
だ。僕は永遠に転生し続ける。全てを忘れ、全てをやり直し、消滅する日ま
で永遠に、毎日死に続けるのだ。

「これにて結審する」

僕はまた、眠りと共に忘我による死の地獄に堕ちるだらう。僕はまた、目
覚めと共に新たに芽吹く生の地獄に堕ちるだらう。僕はこれからも堕ち続け
る。僕が産まれてきたことが過ちであると証明する数々の人々に拠って。僕
はこれからも死に続ける、僕が産まれてきたことが過ちであると確信する自
分自身に拠って。いつまでもいつまでも繰り返された死の輪廻は、僕の魂の
価値を摩耗させ、肉体を疲弊させ衰弱しきったところで生存に必要とされる
行為を強いる。そうして僕はへとへとになって、生きること自体から閉め出

されてゆく。肉体の死を幾多重ねて、魂の死へと一歩ずつ近づいていく。僕は今後どうしてゆくのだろうか、僕は今後どうなっていくのだろうか。永劫輪廻の果て、塵芥と成り果てた魂には、果たして生きる意味があったのだろうか。生きる意味も無いまま生きていたのだとしたら、それは切ない、無窮の孤独を意味しないだろうか。僕はこうして生きていくけれど、それは、眠りが訪れるまでの僕。眠りが訪れた途端、僕はもう僕でなくなり、違う誰か、パラレルな自分に成り果てる。もうお替わりは沢山だ。眠りたい、ただ眠りたい。眠って死んで、二度と目を覚まさない人になりたい。お願いだ、どうか、神様、僕を二度と生まれ変わらせないで下さい。きれいな流れ星になって、そのまま流れて消えてしまえますように。おやすみなさい、おやすみ、みんな。

*

ふとした瞬間、目覚めた。朝焼けがきれいだ。僕はまだ寝袋の中だけけれど、日差しの色合いで分かる。今日は特別な朝だ。僕の目覚めを祝ってくれているのかな。僕の楽園を尊んでくれているのかな。僕の一日はいつも失われた記憶を感じながら始まる。けれど今日はいいんだ。特別な日、そう、誕生日。誰の誕生日かって？ わからないけど、それはいいんだ。毎日誰かの誕生日。いつだって産まれてくる人がいる。それを祝って祝宴だ。美味しい食べ物、愉快なお酒、みんなみんな僕の為に用意してくれたものだ。僕は秘書を呼んで盛大に祝った。何故秘書かって、僕には友達は居ないから。僕には家族も居ないし、秘書しかいない。秘書は友達だし、秘書がいると嬉しい。恋人みたいなものかもしれない。そんな思いは秘書には秘密だ。でもそう思ってる。

秘書たちは僕が疲れて眠ってしまいそうになった今、僕を寝袋の中まで運んでくれる。僕は寝袋の中でしか眠れないからだ。本当はもっと大きなベッドがいいのだけど、僕には寝袋のスペースしか存在していない。何故なら現実、おっと、言っではいけないことを言いそうになったよ。でもいいんだ、もうすぐ僕は死ぬから。僕が死ぬってことは、毎日起きることなんだ。眠ることで死ねてしまう。それまでの自分が死んでしまうんだ。そうして目覚めた時にはもう別人の僕になっている。今までに幾千、幾万もの違う自分が成仏してる。あの世はきつと極楽だ。みんなあの世で楽しくやって欲しい。どうか元気で。ごきげんよう、さようなら。

*

僕はどういう訳かいつも死んでしまう。正確には死に等しい忘我の眠りを経てしまう。眠る前の自分のことを、僕は思い出せない。自分が何者なのか、おぼろげな印象しか無く、目の前の出来事が何だったのか本当に思い出せない。人が死ぬ情景、数限りない死の情景、僕の命の灯が消える情景、星の命が消える情景、そういうものはなんとなく、脳裏にちらっと印象が残っていて、そういう世界を経験して今ここにいる人間なのか、って自分のことを思ったりする。どうして人は生きているのか、自分がどこから来たのか

疑問に思わないでいられるだろう。生きていくためにあくせく努力することなんて、生きていること自体にとっては何の価値も無い事なのに。徒労を繰り返して僕は生きている。生きている間、生きている事に価値を感じられることなく、ただ忘れ去っている間だけ、生きている実感がある人。生きることから報われない人。ただただ生きていること自体が、死んでいることと変わらない人。死んでいることが生きていることであり、生きていることが死んでいることと変わらない人。そういう人が僕であるのだとして、そして、それが何なんだろう。僕が産まれてきたことに意味が無いとしても、それでも僕は生きてしまっている。不思議だ。僕に意味があれば良かったのに。生きる意味と価値が僕に有れば。

※

頭の中で痛みが激しい。何かが脳を引き裂いてまわってるんじゃないかと思うのに、現実にはそんなことは起こっていない。手で頭を掴んでも、その手じゃ痛みが届かない。僕の脳は散らばって、もうスイカを割ったみたいなのに、信じてくれない、もらえない。夢見る間、スイカの夢で、種もいくつか飛ばされた。種の一つ一つから芽が出て蔦が伸びてスイカが生った。それらの一つ一つに僕の名前が書いてある。スイカは僕の顔をしていて、僕の顔を見つめてくる。怖くなった僕は秘書を呼んだ。

「フランク、フランク！」

「フランクではありません、ファンクです」

「ではファンク」

「ファンクではありません、ファンクです。不安苦。不安苦十把ね」

「では不安苦、僕のことを見つめてくるスイカのことをなんとかしてくれないか」

「私はフランクです。プーランクではありません」

「フランク、スイカを退治してくれ」

「仕方ありませんね、ここは私の流儀で行わせていただきますの心」

「フランクは一つ、また一つとスイカを食べ出した。しかし二個食べたところで彼は言った。

「もう食えない、もう無理、私の限界です」

「なんと頼りない」

僕は情けない思いに囚われ、しかし名案を思いついた。

「秘書、全員集合！」

秘書の一人一人にスイカをあてがうと、僕の顔をしたスイカを食べさせたのだ。皆は口々に言う。

「主人の顔を食べるなんて、背德的で淫靡な行為ですね」

「てりり様のお顔のスイカに口づけを！」

「僕は自分の顔のスイカが不気味でならない、退治して欲しいんだ」

「わかりました、君主の願い叶えましょう」

頼もしい秘書は元気一郎だ。十人分食べてくれた。僕はすっかり勇気づけ

られて褒美を取らせる。

「元氣一郎にスイカ一年分を授ける！」

「ひええ」

「うむ、喜んでいるね、僕は嬉しい」

元氣一郎から元氣が奪われると、今度はフランクが言った。

「フランクのこと、フランクって言うてくれる人のことは大好きです。だからフランクは、フランク人として、てりり君を君主として認め、スイカ食べ放題の刑に処します」

「スイカ食べ放題の刑返し！」

僕はフランクこと不安苦にスイカを食べさせ続けた。涙を流して喜んでい
る。喜びすぎて喉からスイカが溢れてきた。悶え苦しんで喜んでいるフラン
クを見るのはいい気分だ。良いことをしたな。僕は素晴らしい人物だ。誰か
らも好かれる幸福な君主。君主として僕に出来ること、それは、僕の顔を
したスイカを人々に食べさせることなのかもしれない。また、僕は僕の顔を
したスイカを怖ろしいと感じていたが、そう感じるからこそが過ちだったのだ
としたら、僕は僕の顔をしたスイカを僕の分身として誇らしく感じるべきだ
ったかもしれない。だとすると僕にとって僕の顔をしたスイカは僕のトレ―
ドマークとして、世に広めるべき物なのだろう。僕はスイカを食べてみた。
美味しい！ 美味しい味、魅惑の神秘、蠱惑の動悸に手足が震える。皆はこの美
味しさに惹き付けられ、つい食べてしまったところ、食べ過ぎて嘔吐し腸捻
転を起こし仰け反って手足をバタつかせてしまったのだな。僕はつい不味い
のかと思って敬遠してしまっていた。しかし全くそんなことは無いのだ。僕
の顔を食べるといふ背德的な趣味を国民の皆が味わえるのだ。それにより僕
への親しみは増し、皆が目の色を変えて僕を美味しそうに見つめることにな
るだろう。嗚呼、それはまるで獣に狙われた小兎、食欲は性欲に似ている、
僕は誰からも狙われて肉欲をぶつけられ続けるのだろうな。まさに蠱惑。喜
びの極み。蕩ける甘美に思いを寄せていると、彼方からやってきた秘書たち
が僕のスイカを持って出荷しに向かった。栽培する分を除けて畑に種を蒔い
ている。スイカはこんな時期に蒔いてもいいのだろうか、僕にはわからない
ことだから畑を見ながら稲穂の国を思った。そういえばフランクは稲穂の
国の産まれだった気がする。魚沼？ 新潟だ。新潟の秘宝、お米粒。新潟に
は偽の朱鷺がいるし、元々日本にいた絶滅した朱鷺に成り代わった外国産の
ニッポニアニッポンだし、それは篡奪された地位と立場と権威と、偽の威光
で尊崇されない偽の光を放つ紛い物の至宝。本当に本物の日本の朱鷺は絶滅
してしまったのに、それを悲しむ人の悲しみさえ、偽の威光によって滅され
てしまった。ここは偽の日本、偽のニッポニア。かつて居た日本のニッポン
よ、その魂よ、永遠に慰められよ。現世以降の世界には、篡奪された形式上
の日本が存続していくぞ。その魂は稲穂と蚕に宿って民と共に息づく。捉え
直された、新たに産まれた伝統主義によって、温故知新された新生伝統国家
主義国日本は、偽の依代を使って本当の実質を成していく。日本は僕の秘書

の多くが生まれた故郷だものな、と僕は思い、それから自分のアイデンティティーがどの国にも帰属していないことを思い出した。自分の親がどの国の人間かも判らない、そんな自分が今も生きていることが不思議でたまらない。ルーツは何処なのか、そんなことを知らないまま生きていられるというのも人間の不思議さだ。自分が何処から来て何処へ行くのか、どこの誰から自分がやってきて、自分の後にどう繋がっていくのか。それを知ることの出来ない存在も居るということだ。けれどその上で僕は生きていくし、自分のルーツが判らないままに皇帝として存在することも出来ている。不思議なことだ。僕はいつから皇帝で、いつから秘書達に助けられているのか、いつから生きていて、いつ死んでいくのか、そんなことを全く把握していないのだ。諸行無常の世界で、けれど僕は今確かにここに居る。息をし、脈動し、手足を十二分に動かして、動き回り走り回り思う存分生きている。それがたとえ夢だったとしても。

正体不明の暗闇が頭の中いっぱいになり、僕は眠りに落ちようとしている。けれど今日の僕はひと味違うんだ、僕は今日まだ眠りに落ちず、新たな夢を人生を、起きながらにして味わおうという算段なのだ。それは白昼夢。起きながらにしてみる夢。ほら、今も目の前に様々な色の光が湧いては弾け、視野は万華鏡の様相だ。緑の光の爆発に、黄色の波が襲いかかる。朱色の光がそこに刺さり、細く強い青の輪が中心から外へと全ての光を押し広げてゆく。その中に浮かび上がるのは、後光が放射状に差し込む神聖な僕、てりりの姿だ。

「なんと神々しいことだろう、なんと目映いことだろう」
その姿を崇め奉る無数の人々が光の前に鎮座し頭を地べたにこすりつける。

「なんと敬われていることだろう、僕は本当に皆の心の支えになれているのだなあ、人々から信仰されるということは嬉しいことだな」

感涙に咽び泣く僕に声をかける者がいる。

「あの、先生、てりり先生、私は幼稚園の頃に先生のお遊戯授業を受けていた者です。先生が皇帝になって早幾年、私に教えてくださっていた先生が飛躍された驚きと喜びと、それ以前にお世話になっていたことのありがたさについてのお礼を、いつかお伝えしたいと思っていたこと、その思いを持って、今この場に来てしまったこと、お詫び申し上げます。ですが、先生のことを先生と呼ぶであろう多くの人々の中で、先生からお遊戯を習った思い出を持つ者は限られるはず、そんな貴重な体験を持った私が先生の為に心を込めておにぎりを握ってきたのです、それは私の素手で握られ、手汗による塩分がちょうどよい配合で先生の味蕾へと最適な刺激を与えることでしよう、ですからどうか、先生、私の手汗を、いいえ、おにぎりを、身体の内に取り込んで、私の成分を先生の身体へと配合なさってくださいませ」

僕はこの誰だかわからない美少女への言い知れない不気味さを吐き出してしまいそうになった。僕はお遊戯など教えたことはないし、幼稚園の先生だ

ったこともない。しかしそれは今の僕の閉ざされた記憶しかない障害下での記憶にすぎず、僕の記憶の領域の外に、かつての今の僕には把握されていない経験があったのであることは想像に難くない。であるからして、僕は彼女の話を無下に否定することはできないであろうこと請け合いであるし、僕による過去の否定には説得力が発生しないのであるわけで、そんな僕によるそんなことないよという反駁にもならない反駁は、彼女の妄想に過ぎない有り得ない過去の捏造という現実を打ち砕くことが出来ず、僕におにぎりを撰取させざるを得ない状況を貰かれてしまふであろうことも請け合いだったりするのだろうし、ああ、でも、どうしよう、僕は彼女の成分を、体内に取り込み身体へと同一化しなければならぬのであるとか、そんなことをしたら僕は絶えず気持ちの悪さを感じながら生き続けなければならなくなるし、それは死ぬまでの間ほんの一瞬だって絶えることは無い。僕はおごそかな気持ちになつて、僕の死の瞬間に訪れるであろう安息の価値を身震いするほど感じ尽くすのだった。

「ねえ、先生、聞いていますか？ おにぎり、食べて」

「先生は、先生じゃないんだ、そして皇帝なんだ、ペンギンとしても皇帝で、だから僕は魚を食べなければならぬ、しかも丸呑みだ、だからおにぎりを食べる訳にはいかないのだよ、美しき少女よ」

彼女の手汗がたっぷり染み込んでいるとおにぎりを手に取って、僕は天高く放り投げた。すると何らかの鳥がサツと啜えて、どこかしらへと運び去っていく。きつと口に合わないだろうし、あてがわれた雛は死んでしまいかもしれない、そんな不幸を生み出した僕の罪を感じ悲しみに暮れながら、成仏を願い手を合わせ祈る。僕の皇帝としての権威は名も知れぬ鳥によって守られた。

「そんな、先生、先生ー！ 私のことを忘れないで、私は」

僕の秘書であるくノ一に峰打ちされて気を失った美少女は引きずられて行く。

「あっそうだ、彼女にスイカを与えてあげて」

僕はおみやげまであげる良い君主だな。気絶している彼女の頭にスイカを突き刺し、彼女の顔の上に僕の顔をかたどる。彼女はいずこかへ退場していき、もう僕の前に姿を現すことは無いだろう。ついでに元気一郎と不安苦十把にさらにスイカを山ほどあげると、再び涙を流して感激していた。僕は国民食として、無限に増殖するスイカを与え続けることにした。食糧事情が解決した僕の国は、飢餓からは解放されたのだろう。しかしそのかわり、大地のそこいら中に根を生やしたスイカによって、国土を乗っ取られてしまったかのようなだった。やはり僕の悪い予感当たっていたのか、僕の顔をしたスイカは、僕の代わりに治世を始めようというのか。怖ろしい。こうなったら、他の食物にも僕の顔を現させ、僕という僕が相対し食物の勢力を競うよう繁栄させねばならぬ。僕は農業担当者へ品種改良に関する研究と開発を行うよう指示した。食品に僕の顔を象らせること、食品が自ら旺盛に繁殖し繁

栄すること。食物同士の過酷な争いの勃発だ。より美味しく、人間から選ばれたものこそが選ばれ、勝ち残って、生き残っていけるようにも改良するのだ。自ら人間に選ばれるように力強く逞しく生きられる、それが食物の営みというものだ。僕は大層満足し、猫の背をなでながら、安心して眠りについた。

＊

ふと目覚めると、あたりは寝袋の橙色に照らされ、僕の周りには青色の草花が群生していた。涅槃。僕の世界は死に絶え、天上世界の台に乗って、テレビのようなモニタが周囲を取り囲んでいる。これが噂のリーダーマンだろうか？ いいやこれは、九十年代に体现されたマルチコンピュータ環境だ。無限に絡まるケーブルの群れ。電脳化を夢見ながらもケーブルに支配された時代の光景だ。ケーブルの波に飲まれ、北斎の浮世絵状になった僕の心の中を苛む電脳が脊髄から脳に達し鼠が廻す回し車が高速回転しどこまでもどこまでも速度を速め高速道路の車のタイヤより速くなった時、僕の頭の中は擦り切れ暴発しスイカになった。そう、我が国家と国王それは僕でありながらネガティブな妄想によって権威を失墜させられてしまう。無味無臭な豆腐によって脳内を侵食された僕は、チョコレートウエハース一枚の代価を支払うことによって、メインアンテナを壊されてしまったのだった。僕のアンテナの中身はバッタで、そこには日本で一番の紅葉を見せる土地が広がっている。大樹の群れ。その木々の一本一本の枝の上には、一人ずつ忍者が待機し、群れを作っている。獲物を見つけた瞬間に一齐に殺す気構えだ。そんな彼らを遠目に見ながら、僕は草原で寝転がる。漫画を取り出して、読み出す。忍術を駆使し、対決しながら食事を採っては、眠りつつ戦う、そんな漫画だ。僕は漫画を読みながら、森の忍者たちを眺め、現実に漫画が巻き起こることを期待して、目を輝かせる。僕の目の輝きに反応した察しのいい何人かの忍者が、僕へと手裏剣を投げてよこした。全弾命中、僕の胸に突き刺さる。けれど僕は身代わりの術を使っていた。僕だと思ったものは大木で、ストリートアート調の絵柄で僕の全身像が描かれていた。こんなものをみて僕だと思ってしまうとは、忍者たちめ、まだまだ甘いな。僕はクスリと微笑むと、忍者の森へと手裏剣を投げて返す。彼らは数百人、その大半をたった数個の手裏剣を投げただけで仕留めた僕は、残りの忍者たちが僕を狙ってシュタシュタ地面に降りたタイミングで用意しておいた発破を爆発させる。忍者の五体はバラバラに散らばって、森は轟音を立て、その地中に膨大に広がっていた空洞の底へと沈んでいく。どこまでも深く死んでいった森と忍者達の死骸の上に、地中から湧き出した水が覆い被さっていく。土の茶色と泥の灰色が混ざった淀みは、何故か底から届く謎の光によって揺らめき、煌めく。不思議な光景だ。僕はこの光景を生涯忘れないだろう。僕の魂の奥深くまで写真のように刻まれたその光景を、僕は瞬時に忘れて空腹に気付く。僕はお腹が空いていたんだな。僕の空腹の進捗に合わせて、僕のお腹の虫たちは鳴り響く。蠢く彼らを感じると、僕は得も言われぬ気持ち悪さを感じる。僕の

中の人々の強欲が、どどめ色のように呻りを上げる。蚯蚓だ。土竜だ。黄金の虫だ。七星瓢虫が喉から飛び出しそうだ。僕は込み上げてきた吐き気を押しどめようとしたものの、その願いは届くこと無く、一気に吐き出してしまふ。こんなことをしていたら死んでしまふ。誰か僕を助けて。僕は医者に駆け込んで、症状を訴えた。内科医は胃力メラを飲ませ、僕は喉を絞めながら嗚咽した。医者から注意されながら僕は生きた心地がせず天上を見、そこにあるシミに思いを馳せた。ああ、動いている、蠢いている。あれは僕の内臓に入ってくる虫だ。口から中に飛び込んでしまふんだ。怖ろしい思いを訴えようとするものの、僕の喉には胃力メラが入り込み、何も訴えることができない。僕の喉の奥の奥に居る怖ろしい害虫を医師が取り除いてくれることを必死で願いながら、僕の中の何者かを殺害するイメージを脳内で展開する。僕の中の彼らが息絶えるその時まで、僕は絶対に死んだりできないぞ。その為ならば、僕の頭の中の脳髓だって引き渡してもいい覚悟だ。喉奥まで胃力メラが入り込んだまま咽せることを厭わず叫ぶと僕は咽せ、僕の中の僕達が一斉に涙を流した。氷鬼でもして待っていてくれ。僕の中の僕達よ。検査が終わり胃力メラを口から抜かれた僕はそのことについて医師に訴える。驚くべき事に医師の答えは僕にまつわる虫の話を全て否定するものだった。妄想か、幻覚か。どちらにせよ僕には薬が投与され、安静を求められた後に何の意欲もなくなつてようやく放り出される。放り出された後のことは誰も責任をとってくれない。こんな状態は僕にとって何の解決にもなっていないのだけれど、そんなことを医師は補償してくれない。正常とレットルを貼つた人間が破滅していようと、彼らは何にもしてくれないのだ。破滅している人間は、なにせ正常なのだから。僕はもはや何の意欲も無く、何の興味もなく、ただ空っぽの形骸が存在しているだけ。夕陽が輝いている。川は流れている。遊歩道からふらふらと川縁に立って、一步、足を踏み入れる。痛い冷たさ、これは冥界の温度。僕はもう生命の世界からは解き放たれ、死者の国に行くのだな。僕の心の中に住んでいた虫たちも皆、この冷たさで凍り付いてしまっただろう。えい、僕は川の真ん中にある大きな岩に身体を滅多矢鱈に打ち付けた。これで、僕の身体の中の凍り付いた虫たちは粉々に砕けただろう。僕の身体は全身痣だらけになって、のたうち回る苦しみを得る。どうだ、まいったか、ああ、まいった。僕は僕を討ち滅ぼすことにより、僕の中の虫たちを滅ぼすことに成功したのだ。勝ち誇る高笑い、川岸に集まった人々のどよめき。僕はそのまま零下の水中に没し、流される。水で歪んで見える視界に、空の暗雲が集まり、目の中に吸い込まれていく。これもまた幻覚か。僕の目の中には際限なく雲が吸い込まれ、空も吸い込まれ、地面も人々も吸い込まれ、川の水も吸い込まれ、自分自身の身体も吸い込まれ、全ては滅して消えた。

*

悪い夢だった。僕の世界は何か悪いことが起きてお終いになってしまった気がする。そんな夢だ。いや、夢だよな？ 夢だと思う。夢の中で僕の心が

どうにかなくなってしまったことは覚えているのだけれど、それは夢だったのか、夢のような出来事だったのか、判然としない。僕の心の中にどす黒い灰色の白馬が駆け回る。橙色の身体を翻して、桃色の印象を強く残す、そんな黒い灰色の白馬。跨がった僕は僕の中を馬で闊歩する。馬は強いな、力強い生命、命に殉じて生きられる力を感じる。生きてしまえて、それで馬は、走って食べて栄えて走る。端折って田淵違えて端折るんだ。それで馬は田淵に端折られて、今も僕の心の中に巫山戯た会話を齎す。田淵の馬は食べるんだ。馬は食べ物なんだ。行軍に付きものなんだ。人を食べるよりまず馬を食べることから始めよう。そういうもの。落下された者は死んでしまう。馬だって食べられたくないのだ。だから馬の前にイクラを食べよう。もう幾らイクラを食べてもお腹は一杯にならない。カシスオレンジを頼んでもカシスがカルーアなったりしないということなんだ。カルーアオレンジに魅力があるか、わからないが、訃報を気にしても葬儀に間に合わない。そんな人生だ。オレンジにミルクを混ぜた総理の葬祭。轟く魔法で驚き果報。味醂より酢よりお汁粉を十分に煮て、煮沸された汁粉を手術中の患者の患部にたっぷりと注ぐ。そうしてお腹を閉じると、果たしてどうなってしまうのか。それを想像しながら僕の友達に、患者氏の話相手になってもらうんだ。代わる代わる人々が絶唱しながら患者と向き合っていると、患者は嫌がり耳を塞ぐ。代わる代わる人々が辛子を塗り込むと、患者は嫌がり振りほどく。何が面白いか判る人、判らない人、それぞれで、それを判ってしまった時、その人は標準的な人間性から逸脱し、人々の心の中のアシスと思える楽園に存在しながら、人間の尊厳を踏み躪り、誰からも人間として存在を容認して貰える立場を失ってしまう。そうして僕達に獅子の教えを与えるのだ。崖から落としても登ってこい、という体の、殺害なのだから。珈琲を飲みながらそのことについて考えるのもいいでしょう。お酒を飲みながら考えるのもいいでしょう。考えないのもいいでしょう。人に人としての価値が芽生えることもいいでしょう。人間に人間としての価値が存在しているなら、それでいいのかもしれない。人間に人間としての存在価値があるだなんて、そんな夢みたいなこと、どうして僕は思ってしまったのかな。馬に馬としての価値もなく、ただ食用で、人に人としての価値もなく、ただ食用で、職能について食料をシヨック療法したところで、詔勅が褥瘡を癒やすとも限らないのだし、ただ、明治維新があるうとなかろうと、皇室は存在してきた訳で、その正当性が有ろうと無かろうと、ただそこに皇室は存在するのだから。正当とか不当とかいう問題では無いのだし、だから馬が馬として存在するのだから、それを食べることになったとしても、きつと誰かが許してくれる。その誰かとは、僕自身だ。僕の心の中の虫たちは焼き切れてしまった。排泄されて無かったことになった。産まれてきてから今に至るまで汚染されたことのない存在になつて、人は人として生まれ変わった。僕は今、新たな人間だろうか？ 然り。だから僕は黒い白馬に跨がって、白い黒馬へと邂逅させる旅へと飛び立ったのだ。空は気持ちがいい。鳥は高く飛び、永劫なる宇宙へと連なっていく。

真空を越えた先にある酸素と窒素とその他の気体の配合が人類にとって都合のいいものである惑星を探す試みは、しかし徒勞であろう。そんなの地球がそうなってたからそこで発生したのが人類だというだけの話で、他の場所は、全然違う状態なんだから。ではどうやって人は生きていけるのだろうか。自分たちにとって都合のいい状態を、他の場所にも適応するしかない。テラフォーミング？ いきなり星ごと改造するのは、性急すぎる。一步一步、人がまず生きていられる状態と領域の確保から始めることだ。そうすれば人は生きていられるし、生きていられる状態の確保を基盤として、それ以外にそこに存在する状況から得られる面白みというものも感じられる状態に至れる訳だ。そうして人が自分たちの領分を増やしていられる状況の中で、生きていく。それが節度ある暮らし、丁寧な暮らし、慎ましやかでおしとやかな生活。そういうものなのだ。紳士淑女としての生き方。そんな幻影を強いられて、望みもしない嬉しくも無い強要に絆されて、良い人類は絶滅してしまった。生きている価値のある人間は死に絶え、生きる価値の無い人間が、動物として生き永らえる。無意味な知能により無意味な文言を記述し無意味な音韻を口から吐き出す。無価値な感情に拠って駆動し他者の主体性を侵害し続ける。そういう暴力としての人間が、この世界に蔓延っている。世界の無軌道の中、産まれたばかりのお年寄りも、上げ膳据え膳で飲み放題食い放題、食べることで時給五千兆円が発生し、吐き出すとその千倍もの罰金を払わせられる。そういう世界で青椒肉絲を飲み、ピーマンによって胃を攪拌し、肉だけを腸に届かせないぞ、という決意を持って、ただただ食べ、飲み、吐いたり吐かなかったり、水を轟かせる滝を逆流させ、金の卵を有む鶏を食べて廻るのだ。そうして僕は滝から行者のように身を現す。誰も見る者の無い状況で、されど聖者は聖者で有り続けるのだ。味方によって落書きをしたりしなかったりする彫刻の前で、聖者は祈り続ける。祈った先で理解が及ばない民衆に対して、聖者は見捨てる他無いけれど、見捨てられた者達を除いた人々に対して生きていく価値のある人間はみんな仲良く過ごしているけれど、生きていく価値のある人間が富裕層だとして、そこにいない貧困層の中から生きる価値があると認定し合える立場になれた存在は出世したと言えるのかもしれないけれど、認定を得られない場合に生きる価値が無いままであるかということ、それも甚だ難しい問題で、人間の人権というものは概念上存在しているにも関わらず、現実の世界の運用上、配慮される機会があくまで形に過ぎず、基本的には尊重されない。尊重される価値のある人間が生きていられるなら嬉しいけれど、人間にとって人間の価値はあまり重要でなく、それが自分のことだと感じられないまま他者の権利を阻害する。利益に価値が存在するという概念をそもそも持っていない。毀損され失われた人々の価値は、争いによって無くされた花のようなものだ。きれいに咲いたその花は、既に失われた死者の世界に属するものになっていて、きれいにきれいに飾り付けられた世界の肯定感情は、剥き出しにされた海老の剥き身のような綺麗さでもって君の死を肯定する。僕たちに残された世界の収束感情は、

終末になって恍惚とする死の肯定者たちによって剥き身として食べられる。捧げられた無数の海老の剥き身。その下には青椒肉絲が隠されており、幾ら食べても食べきれないし、イクラは幾らでも食べ放題だ。視界には獅子が蠢いている。肉を食べたがっている。青椒肉絲から取り出した、ほんの僅かな肉の切れ端を食べさせた。吠える獅子、唸る獅子、噛みつく獅子、噛みつかれた僕。腕が食いちぎられ、足が食いちぎられ、体躯が齧られ、頭の肉を削がれ、食われ、僕は僕で無くなっていく。激痛に叫びながら声帯を噛み切れ声も出せず、僕だったはずの僕の一部は獅子のお腹に納められていく。こんなに血まみれになってもシャワーを浴びないのかな、獅子は、とぼんやり思ったのが最後で意識は途絶した。僕が彼に食されたのは神の導きによるものだったのかもしれないし、かつて彼が達成したならかの功績に見合う報償だったのかもしれないし、僕という人間が産まれてきた罪への刑罰だったのかもしれない。そんなこんなで大いなる魂と一体化した僕はこれらの出来事を無意識的に察知し、ただ世界はそのように進行しているのだと感じながら、涅槃と一体になった。

※

僕は身震いしながら体を起こす。嫌な夢だった。ここのとこる僕は何の見返りも無い夢ばかりを見ている。僕の生活ってこんなものだったっけ？ 思い出せない。何しろ僕は目が覚める前のことは何も覚えていないのだ。昨日というものを思い返す事ができない。僕の人生とは何だったのか。何も思い出せない。何か思い出せれば。何かとは何だ。何について何が何なのか何のことも何とも何か何でもないようだ。それは一体どういうことなのか。何であろうと、何でもないのだ。何も何故に何だろう。なななな、茄子、難解、名札。何でもいいし、何もかもが反転している世界。なかんづく南蛮渡来、軟式テニスの軟球の何某か。仲間意識について仲良く鍋を囲み、中だるみを感じながら、何遍も軟弱になんちゃって軟膏は難航する。何でも大丈夫な半ばを七色に染めて、泣く泣くナイチンゲールは亡くなった。ナビもなななあにナイアシンを内服する。のうのうと能面に乗り込んで、のべつまくなし伸び上がるのだ。それこそが畜生道に堕ちた竹馬の友。ちり紙交換されたチワワなのだ。たわむ工房に返す片栗粉。太陽に登る装甲で固められた原子の光は、ちょっととした瞬きの光に過ぎなかった。

「もう少々お待ちください。娘は猛烈にまくりまします。まくり上げて、まくしただてて、申し奉りまして、それからさらに中央に寄せて、四角い中央を丸くするので。総合的な判断を以て、収縮し拡大しまた収縮したとしても、当初のきめ細かさを失うことが無いものなのです。それが英知であり、我々がずっと行ってきた実験の成果なのです。枯れ木に花を咲かせましょう。さすれば海苔は海から採取され、乾燥させられて人の口中へと入ることもあるでしょう」

もう一度行われた蒟蒻のアクセラレーションが、塩梅を変えて消化器を刺激する。メンタルがマサチューセッツ州によってマチャチューチェツチュ中

に変換されてしまう。問題行動を把握せよ。外道よ絶えよ、欄外に落雁に落花生なのでランボルギー二なのだ。紫色のランチョンマットを敷物と呼ぼう。橙色の敷物と呼ぼう。紫色のランチョンマットなのに、橙色の敷物と呼ばれる紫色をしたランチョンマットは、蘭ちゃんがランチャーを撃って、ちゃんらーんと場を盛り上げた。ちよるーんと尻尾が出たけれど、ジョン・ロインなら気にすまい。レックスのネックスがラックスでロックスになる。乱暴な気持ちに精神が囚われ、映画監督の名前を叫びながら録音を書き付けて轟音を辿り録画充電器によって再開発の名乗りを挙げる。メタルポータルは矢鱈目鱈に最終的な判断を依存することなく、最高の成果、成功のときめき、最後の晚餐など矢鱈に轟かせてぐるぐると競技場に線香花火を振りまいて、柿の種をパリポリ食べるのだ。操縦桿はそういうことになっていく。検査機関は千年震えて待つという。アリアの中に向上心が見受けられることよって、勿体ない気持ちがあが弱弱になってしまったのだ。だからといって何もどうすることもなく、問題に基づいた落雁の焼売がリュウマチに効いたと喧伝するような人のことだから、僕はいつまで経っても健康にならず。蚯蚓の新撰組として登場した者たちは、泥濘に百日紅、洋蘭の中に木綿豆腐。万葉集の上に木魚を置いて、注目を浴びるための策略を、ただひたすらに、練り上げていったのだった。そうして胡瓜を食べ続けた結果、無味無臭の体が手に入った僕は、秘書を一人呼んだ。

「おーい、綾ー」

「なにかな」

秘書の綾は、随分前に跛行して茶毘に付されたはずだった。そのような振る舞いを僕はみつともなく敬虔な心持ちで終身名誉会長に登場させられるような土竜の人間に侵食させられ、ぺんぺん草のペンペンとペンギンのペンペンによるアイデンティティーを争う戦い、ペンギンの口から吐き戻される生魚、それを丁寧な裁いて断罪し、死刑とされてしまったのだった。死刑になった生魚は、ペンギンの口に投じられ、消化され、茶毘に付されたのだった。そうして死を味わわされることに、生魚は大層な不満を覚えていた。生魚は何の罪も犯していなかったからである。社会にとっての不明を恥じるでもなく、蒙昧に茗荷谷を網膜にマイマイカブリされた我々人類にとって、ネックスを暴走させて破裂させることがかわいい。一生懸命話す赤子が零歳なのに喋り続けることが奇蹟のように感じられる。そんなマイマイの被りを振って、赤ちゃん扱いされないようにペペロンチーノを食べて蝸牛であることを必死で隠そうとする。蛞蝓であることを覆して塩を摂取しようとしてしまう。自らの運命に抗う罪人、それが生魚だ。それなのに生魚ときたら、全くもって無罪千万。何の罪も犯さない存在として産まれ、弾劾され、王様になって死したのだ。死んだ魚の王、それは尊く儂い。全ての死んだ魚を統率し、その死した意思を司る聖なる存在。それはペンギンによって消化されたけれど、その行為はあまりに尊く、自らの身の全てを播り身にするに値するほどの苦行を耐え抜いてまで魚の罪を自らで体現された、崇高なる聖なる聖

騎士としての生魚なのである。魂はペンギンの身を離れ、地球の全ての魚を包んだ。そうしてみつともなく蠢く蛞蝓は茶毘に付され、蝸牛は踊って歌った。その動きも声も、人間には観測できないものだった。夢中で蠢く金色の綾は秘書としての勤めを果たすべく、僕であるてりりの職務をサポートしようとして立ち上がったものの、今は亡き生魚の存在感に圧倒され、わなわなと震えて立ち上がれなくなってしまった。そうして、てりりは身近な存在の力を借りることが出来ず、封じられたように石鹼水を含まされた綿を体に詰め込まれて、ロッキーマウンテンに投げ込まれた。そこはアメリカのような風体をしたヨーロッパ諸国で、その中にはアジア圏を感じさせる風潮も存在した。そこに僕たちの修行の場はあって、てりりはそこに投げ込まれてもいたし、はたまた宇宙ステーションの中へも投げ込まれていた。されど山へと投げ込まれてもいたし、海中に投げ込まれてもいた。潜水艦や清掃車の中へと投げ込まれた例もある。秘書の鞆の中に投げ込まれていた時は救出された例もあるものの、シュレッダーに投げ込まれたときはどうにも出来なかった。そんな困難を乗り越えて、てりりは蛞蝓と蝸牛と生魚とペンギンと友情を育むことが出来たのだった。処刑を命じた者と処刑された者との禁断の愛。そこに産まれた永劫回帰は、ミュシャの絵に描かれたような素敵さによって皮膜を張られ、肯定的な存在意義を身につけさせられながら、身近な沸点を八点で発展させたのである。ミュータントの息吹を摂取する僕。妙ちくりんの息吹を摂取する秘書。その息は遺棄された後に調理され、評判を橙色に染めていくのだった。物の見事にタイヤは外され、螺子だけを丁寧に集めていく。そうすることで螺子屋は成立するし、残された車を買おうとする悪しき者は現れづらくなる。右手にタイヤ、左手に螺子。これだけを手にして生きていく覚悟のある物だけが、彼らの社会で生き残っていける。落花生を食べたい。殻は要らない。ただ中身さえあればいい。そうして僕らは彼らと共に、メコンデルタの中心部へと向かい続ける。バミューダの中心部でも構わない。どうせ僕らは根無し草、帰れなくとも待つ人はいないのだ。

向こう岸にDVDを手にした映画好きの女性達がいる。ヨーロッパ趣味の、決して凡俗なる一般人とは相容れない、痛々しいまでに豊かな感性が横溢した女性達だ。その年齢は、零から百を越える者まで。需要に左右されない人間のあり方を提示する彼女たちは、僕らの持ち込んだDVDに好奇心と恐怖を以て対峙してきた。棒でつつき、矢で刺し、盤面がめちやくちやになった時点でプレイヤーに放り込み、再生できない事実を確認すると、僕らにその責任を求めてきた。僕らはミントのDVDを大切に大切に運んで来たのに、瑕疵の無い素晴らしいメロディーと盤面を見せたかったのに、彼女たちはその知恵の乏しさから僕らを炒め、食し、満腹となったのだ。足を切り取られた僕は身動きも出来ず、肘で這い、小用を足すことすら困難な状況の中で、時にはしくじり、穢れた身を清める術も持たない。彼女たちは僕を労ることなく、無造作に食物を消費していった。僕の仲間は逃げ出せただろう。僕の腕もすぐに無くなってしまおうのだろう。けれど人は、人としての尊

敵をいつまでも保ち続ける。人間は誰もが生きている価値がある、などと言ったところで誰も信じてくれない程に、僕の身体は穢れていた。汚れた体を見て、尊崇してくれる人間は、極めて乏しく、人々の内蔵機関が人知れず臍として内部に存在していることに気付かず、過ぎる程に、人の洞察力は乏しいものなのだ。コイサンは僕を包み浮かび上がらせる。奪われたカメラのシャッターは切られてゆき、人間の尊厳の失われた様を克明に写し出していく。現像などする必要もない、僕のカメラはデジタルなのだから。けれど彼女達にそれが理解できるだろうか？ 僕の心の中のオアシスが、彼女たちへのコンタクトを求めている。理解し合える関係に、いつか死ぬ前になれたらいいな、と、現実には到底そうなれそうにない出来事を夢想し安堵する僕。トマトジュースが飲みたい。満州で流行った食べ物を食べたい。そんな時期が、この世界にだって存在したのだ。失われた過去は、けれど誰しもが一緒に、忘れたままでいられるほどに幻なのだ。僕の身に起こった現実。けれどそれは忘れられ、しかしその場に巡り会った人にとってそれは現実のまま思い起こされ続ける。現実の行為は、世界に自らを刻みつけてしまう。望むにせよ、望まないにせよ。無理強いした忘却は、されど本来性によって思い起こされてしまう道理なのだ。僕はトマトジュースをゴクツと飲んだ。

「おかわり！」

バーでトマトジュースを飲み、ミルクを飲んだ。お腹の中では攪拌され、分離されてしまっただろう。僕の正気はトマトジュースによって保たれているというのに、僕の心の中にはなんだってむくつけき大男の残滓が残っている。面倒なことだ。僕はトマトジュースを飲んだ。

「おかわり！」

そうして僕はその晩に、十三杯ものトマトジュースを飲み、チェイサーとして四杯の牛乳を飲み干した。丁度、一万円だった。僕の心の中はトマトジュースとミルクの混ざった精神が醸成され、ミントの香りのチョコを平らげると、僕はギューニヤンを呼び出した。

「ギューニヤン！ 来てたも」

たもろうと、たもらざろうと、ギューニヤンは僕を訪ねてきた。かつて僕の秘書だったギューニヤン。今は街中の人に牛乳を売り歩いて生計を立てている。

「ギューニヤン、ギューしてにゃん」

ギューニヤンは不思議そうな目をしてから、全てを悟ったように納得し、目を輝かせて僕を抱きしめてきた。

「ギューニヤン牛乳を飲むにゃ」

ギューニヤンのミルクを飲み干すと、僕はおいおいと泣いて崩折れた。ギューニヤンは僕の目線まで頭を下げ、僕の頬にジツと顔を寄せてくれた。僕はまるで連結した芋虫だ。このまま踏みじられ、蔑まれ、誰かの自尊心を不当に満たしてしまうだろう。そんな思いを抱いていると、通りがかった人物が、こちらを見て、言い放った。

「羨ましい！ 僕も仲間に入れて！」

彼の顔を仰ぎ見る。彼は！ 飽山（あきやま）だ！！ 僕が信仰する神の偶像を作った、天才トラウマ作家だ！！ 人を神がかりにできる能力を持ち、世界征服を狙う社会福祉主義者だ。彼は二十五歳にして、年収は億を超える。宗教法人を持ちながら漫画を描き、その内容によって信者を増やすという、いかがわしいカルトな天才なのだ。

「あなたが、どうして？」

「僕は私、私は僕。僕の私は君として、芋虫になった。それは過負荷体験でもあるし、カフカ定説でもある。見事なまでの連結は、僕もそれに加わらざるを得ない蓋然性が含まれてしまうものなのだ」

天才トラウマ作家は術学的な言説を披露し、僕らの頭へと自らの頭部をくっつけて横たわりY字様に三方に広がる人体の道標。どこまでも足先へと歩き続けるが良い、と暗示しているかのようだ。

「キューニヤン、ありがとう。キューニヤン牛乳美味しかったよ」

僕は礼を言っ、キューニヤンに立ち去るよう促すと、飽山氏に振りかぶった。手に持たれていたトマトジュースグラスは彼の頭頂部に乗り、僕が振りかぶった振動によって中身はざぶざぶと彼の頭にこぼれ落ちた。口元まで垂れたその汁を、彼はすごい鼻吸引で吸い込むと、おもむろに咽せだした。

「ゴホッ、ゴホゴホッ、ゴーホ、ゴホッ、ゴッホゴッホ」

咽せながら咽せる歌のメロディーをハミングしだした彼をみて、やはり人間はここまでやらなければ一廉の人物にはなれないのだな、と納得し、彼の安寧を願いながら、健やかに目を閉じ眠りについた。

僕の眠りは安全だ。だって眠っているのだから。眠っている最中に何が起きようと、僕の人生は僕のものだし、それを阻害する人物についてなんて、一顧だにしてあげる価値も無い。ミルクを飲んで、それから目を覚まそう。眠りながら飲むミルクは最高だ。それもキューニヤン牛乳。キューニヤンはそれを置いていってくれるほどに格調高く、気高くも親切な人柄なのだ。人間の尊さ、それを人間と判じ難い彼女が実現させてくれているのだから、僕ら人間は彼女を見習わなくてはならない。そのことについて僕は飽山に見解を求めた。

「知らないよ、だって僕は君の夢の中の飽山なんだから」

飽山は僕の心の中で蠢いた。そうだよな、僕の中の飽山なんだから、天才トラウマ作家としての存在感を感じさせるだけで、実際には新たなアイデアを僕に供給してくれようがないのだよな。しかし僕は自分の枕元に立って預言をしてくれるような存在としての飽山を期待していた。だから僕の心の中の飽山だって、僕に閃く助言を与えてくれても良いはずなのだ。そんな僕の期待を裏切った飽山に対し、僕は恨めしい気持ち湧いてきた。怒りで目を覚まし、僕の頭に頭をくっつける飽山氏に向かって、僕はこう言った。

「あなたは どうして僕に閃きを与えてくれないんだ！」

何のことか判らない飽山は、瞬時ぽかんとした表情を浮かべた後、振りか

ぶって「隙間なく散じるさんざめく事象の認識を簡略化するが良し。それによって意識の鳥羽口が非複雑なものに成り代わり人生が効率化されること能うアウアウ」と整理整頓を奨めた。そうすることによって「君の中の解決されない事態が整合し、自然と新たな案の生まれる段階へとアセンションされるわな」のだそうだ。あまりにうさんくさい話に僕はいぶかしげながら「考える前にやってみよう」と言われるまで、飽山の顔をしげしげと眺めた。いつまでも彼を眺め続ける僕のことを飽山は見つめ続ける。そこには恋？

愛？ ううん、そこに至るまでの何か、そう、ときめきが感じられて、そこには切ない恋心へと続く萌芽としての好きが滲み出されてくる。こそばゆくなった僕と飽山は、そのむずがゆい気持ちを解消させるため、口づけた。舐め合う舌と舌、飲まれ合う唾液。それは美味しく、喉の渴きを潤してくれる。人体とはよく出来たものだなあ、と感心しながら舌の筋肉の疲れを感じてくるまで交接しあうと、僕たちは冬の寒い町中へと、裸のまま駆け出した。雪で白い街の中、僕たちは露天の温泉へと向かって燥ぎまわる。僕たちの行いの一部始終をきくと神様は見てくれていて、僕たちの無邪気な魂に暖かいお湯を注ぎかけてくれるに違いない。僕たちの踊る両足と、その中心ではじける感覚器官の快さを、お湯と雪とで代わる代わる刺激し、僕達の人生に忘れることの出来ない経験を齎してくれる。町中の人々はみんな僕たちをぼかんとしながら見つめていた。けれど僕たちの楽しそうな様子に、皆、微笑みを浮かべてくれるのだった。空の漆黒が銀河の光で弾けて人々の網膜に映る光景を湛えたまま白い世界を永遠に凍り付かせ未来の彼方まで届かせ続けるのだった。

＊

僕が目を覚ますと人々の心の中に僕の記憶は残されていなかった。秘書やメイドやボディガード、その他の誰も僕のことを思い出せないし、僕も彼らのことをよく思い出せない。僕の中にある人々の記憶は、なんとなく臍気な、何だか判らない抽象画のようなイメージに支配されている。脳内の謎の紋様を僕が記憶に焼き付けようとしてもそれは記憶されないし、記憶を忘れてしまいたいと思ったとしても上手く無くなってもくれない。僕のことを知っている人にとって僕のこととは何らかの価値を持つものだと思って欲しいけれども、僕の願いとは裏腹に、僕は他者から望まれていないようだ。僕の思いがどこにも至らない現象世界で、僕はこの先ずっと誰にも感知されないまま生きていく気がする。僕の世界は何処にあるのか、僕の心の中にだけあるのか。僕にはもう何もわからない。僕は断崖絶壁からこぼれ落ちて消え去って行くのかもしれない。僕の視界には誰も映らない。数人が蠢いているような幻が見えているけれど、現実では無いのだろう。幻の現実。それが僕の感じている全てなのだろうか。

この世界で、僕の猫だけが僕を頼りにしてくれる。それがとても嬉しい。けれどその黒猫がいない時に猫が僕以外の誰かを頼りに生きていってしまうのだったら、僕はもう猫を大事にすることなんて出来なくなってしまうかもしれない。

れない。それは僕の存在意義が奪われることだから。僕はしゃがみ込んで両足を放り出した。左足に誰かの手が添えられる。幻の存在、誰かの手。それは猫でなく、僕のことを知っている人のような仕草を見せたけれど、僕にはそれが誰なのかわからない。猫なのか？ 人なのか？ 僕の心の中の誰か。それは秘書だったような気がするけれど、果たして僕に秘書は居ただろうか？ 居るような、居ないような気もする。気のせいだろうか。僕の体の中から秘書が生まれ出てくることだってあるかもしれない。秘書という仮の名の、不思議な物体かもしれない。それは現実に起こるかもしれないことで、誕生した秘書はそのうち僕を取って喰らうかもしれない。が、別にいいじゃないか。相手は尊い存在なのかもしれないし、僕の肉が捧げ物になるのだったら、身を捧げるもまた一興。僕はふと天井を見上げる。照明の光が眩しい。清浄な幻像が脳内に記憶される。この記憶というのが問題だ。僕の記憶は現実とは違ったもので、僕の中で一貫性のある像だとしても、人々の心の中に結ばれた像とは違う認知のされ方をしているからだ。僕の心の中の嬉しさ、喜び、眠気、などは僕の一部として認識できるけれども、僕の心の中のそれらは、他者から観測することは今のところ難しいからだ。脳の記憶がどのように保存されどのようにすれば観測出来るかは研究が進められているらしいが、僕はまだそんなことを適用してもらえていない。ただ眠く、ただ希望を持ち、自分に良い賽の目が振られることを期待するだけ。

僕はもう何もなくて良いのだなと気づき、眠気に耐えられなくなった身を寝袋に投げ込む。暖かくなり、眠気が増し、夢へと自らを誘う。このまますぐに眠ればいいけど、それで僕は幸福になれるかもしれないけれど、それで、僕は、いいのか。何度も自問自答しながら、僕の意識は薄れていった。

※

目が覚めて、初めて気付く。いつもと何も違う日のようにでいて、全く違う一日だ。気付く。最後の目覚めの日なんだ。毎日の、代わり映えのしない泥濘のような日々を幸福と言うのなら、今日はその終わりが来た最後の日なんだ。最後なんだ。最後。人生の終わる日。眠りについたらそのまま目が覚めない日。目が、覚めない？ そう、もう目が覚めない。僕の終日。終わりの日。不思議な気持ちだ。

僕の飼っていた黒猫の名前は三日月だった。僕に啓示が降りてきて、その瞬間に決めた。三日の月と書いて三日月。決して満月では無いところが肝で、満月であったならばその上に腰掛けてティーを啜るなどという行為がツルンと滑って落ち行きて出来なくなってしまうし、そんな月に相応しいのはやはり欠けた情緒、失われた何某かの温情と冷酷が混ざり合っている有様が、心に響く三日月なのだと思う。

「三ヶ月というのは三日月とは違うけれど、実のところ同じなのかもしれない」

と、思うなどしながら、僕は月の尻尾に腰掛けてティーを飲んでいる。砂

糖が二つ。さらに三つ。甘いものが好きな僕には丁度良い甘さ。「おかわり！」薄くなった安らぎの中でずっと外連味を味わいながら祖国に思いを馳せる。我が故国、日本に辿り着ける日はいつか来るのだろうか。僕は日本ではないにも関わらず頑張って日本そのものであるかのように統治せられたあの程度の広さのある区域である土地に何時からか住んでいて、そこは租界のような場であったのだけれども、だからといって洗浄された黒猫は白くなつたわけではないのと同様に、非黒人を黒く塗つても黒人には為れない訳で、僕は黄色人種に生まれたのだから黄色人種としての自分を受け入れなければならぬ気がする。しかし黒猫は毛が黒いだけで皮膚の色は関係なく黒猫なのだから、黒髪の僕も黒人と呼んで良いのではないか、との疑問が胸に湧くも、僕が憧れる黒い毛並みの猫には、僕は到底、成り得ないのであった。僕の最後は、僕の三日月がこの世からいなくなつた事と同義で、どんだんどロンドロロン論だ。アカデミックなアカデミアナツツはマカデミアナツツとは違う物のようでもあり、言い方の問題なのだろうけれど、地下深くから湧いて出てきた人々が太陽に目をヤラしてしまったことは、悲しむべき出来事なのだ、と、深く深く思い至るのだった。夢の中の僕の冒険がゲーム状で繰り返されることは、一回制である生物の寿命にとって自らの運命の限界を越える体験を味わうことでもある。僕は起き上がり、世界の滅亡を感じながらも、歯を磨いて口を濯いだ。一日の始まり。けれど今日は何も起きないかもしれない。僕の腕は調子良く振るわれて、行きつ戻りつ界限の目玉として日本人街に据え置かれた。出船の入り江に豪華クルーザーとして富裕層の趣味が見受けられる。行手は帆先、動物に噛まれた痕を割り、くるくると帆船に反抗しながら六百人（ろっぴやく・にん）という名の女性一人が燥ぎ、有象無象（うぞう・むぞう）という名の男性一人と、其他大勢（そのた・おおぜい）という男性一人、最後に、雑魚（ざ・こ）という名の性別すらも判別できない一人、合わせて計四名が踊り明かして今夜はダンスナイトオブオールスターウィズ寸尽（スンズク）にて、御霊の燃える青白い炎がテーブルの下へ潜り点火する。四人は炎上し、四人でもあるも数千千人に見える彼らの特性が存分に発揮された我が家の炎上、ワインを注ぐ飽山はカタカナで「ワガナハ、アキヤマ。カクメイ、スルゾナ」と発話すると徐ろに燃え盛る我が家に炭を焚き付けていった。炎は天高くまで突き抜け、行手を阻む大量のうどん粉が爆発し燃え盛る家を八方に散らすと共に火は消え、水が支配する海へと流される。龍の宮城の燃え跡に脈々とした脈ある物体が流れ出て掃り鉢消える、烏賊滑る。海底領域に僕が密かに安置していた金剛像は塩と水圧に破れ舐瓜食って朽ち果てるまで午後三時発の虹化粧すると紅顔の美少年よろしく微笑みが絶えない日に落ち窪んだ。昔々のことじゃった。昔、それは三分程も昔で、そんな昔のことは忘れた。一寸先のことは、先すぎて分からない。ぐるりと首を回し一回転したところで元へゆつたりと回転し戻す。鰯の刺し身を楽しみに世界を抜け出し醤油で食べる僕の鰯と白米。みゃくり上げる

と、想定範囲内の攻撃がやってきて、思惑通り撃破し反撃によって敵勢力

は勝ちを確信したものの、僕からの攻撃によって彼らは霊の世界へと巻き込まれていった。僕は彼らたちを召したので神から褒めてもらったし、彼らが僕たちを殺すことが出来ず地獄で戦の続きをやっているのを見て御愁傷様と唱えるばかりなのだ。

僕の一日は今日で最後だと言うのに、僕は他者の為に戦い続けてしまったことを悔やんでいる。最後の日くらい自分の為に十分に生きてみたいじゃないか。だからこそ、自尊心の得られる他者の為の仕事をしなくっちゃ。そう思い、僕はフリーハグ一回1000円というフリーでないハグを始めた。60分で9人来てくれた。一人はサクラで時給2千円だから、9人のお客様の分2000円を全部サクラに渡した。だから結局フリーハグなのだ、僕は。無償の行為になっってしまうながら、お金を取っていることからフリーではないという烙印を押されるといって、泣くに泣けない僕なんだ。「うがあああ」叫んでもんどり打って出て吐いて顔で玄関先を擦り掃除したところ、その屋敷の土埃を吸い込んでしまった。「がはあッ」涙が止めどなく溢れ、それは自分の体積の何千倍にも及ぶ液体の海で、丸の内一体を冠水せしめた。皇居のお堀と一体となって浸水は果てしなく、途中で消防士や自衛隊がいるいるなことをしてくれて僕の涙は止まった。それでももう水死者を出さなくていいんだ、とホツとした僕。請求書を見てまた泣き出してしまった僕。それが僕の最後の涙で、日本は海に沈んでしまった。そうして初めて、僕が生まれ育ったのが本当の日本なのだと思ったのだ。

※

「はあ、今日は初めて途中で眠らずに一日を超えた。今や僕の人生はマッチを擦って着けた火の僅かな瞬間を残すのみだ」

僕の人生がどういうものなのか、僕にはきつと判らないままなのだろう。僕も、皆も、いつか救われますように。僕は猫の三日月の微笑みを思い返す。最後の一日は、終わっていく。

とこしえに、もるともに。にほん、にっぽん、ひのもと。さようなら。さようなら。永遠に。僅かな期間の、永遠に。

「三日月の微笑み」

了